兵庫県たつの市御津町

朝臣4号・5号・7号墳測量報告書

― 旧御津村の先人の足跡を再検証する ―

北　　東

南　　西

朝臣4号・5号墳上空から360度の展望

2020年10月25日

みはらし会 考古部会

兵庫県たつの市御津町

朝臣4号・5号・7号墳測量報告書

― 旧御津村の先人の足跡を再検証する ―

2020年10月25日

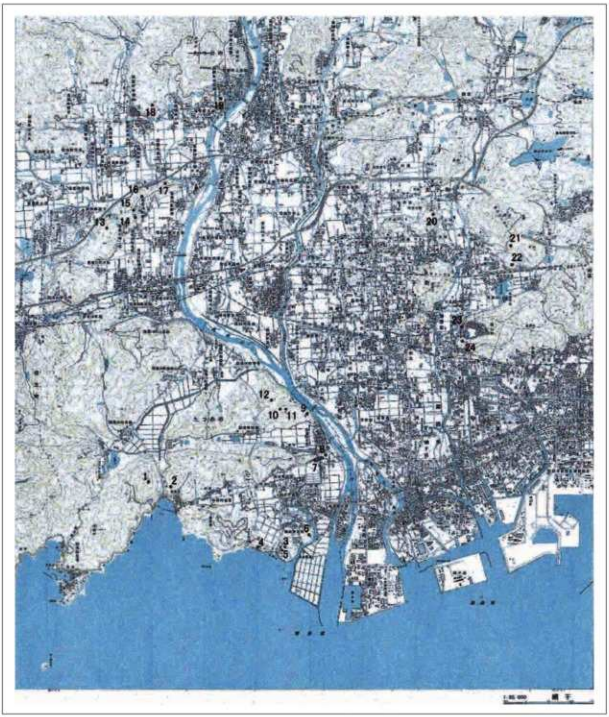
みはらし会 考古部会

巻頭図版1　1961年当時の旧御津村の航空写真

- 左海岸沿いは旧室津村と室津港。
- 岩見坂（66m）南下が、古墳時代の海上交通の玄関口と思われる、岩見（伊津・御津）港。
- 岩見坂北側の平野が、揖保川町河内の田園地帯。
- 写真右側に流れるのが、西から富島川・元川・中川・揖保川。

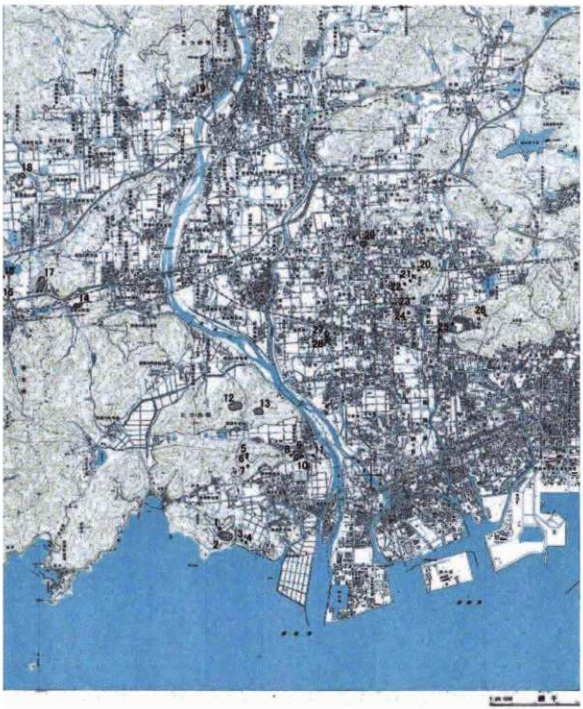
巻頭図版2　1961年当時の旧御津村朝臣近辺の航空写真

- 南中腹まで、畑が見てとれる。
- 左下は、御津中学校。
- 御津中学校北にはまだ採石場はない。現在その跡地は太陽光発電所となっている。
- 右の尾根先端の南北には西芝電機（東京芝浦電機）の社宅。南側の社宅の地下はオノ木遺跡。
- 朝臣山の東側の小山には、小丸山古墳と山王山古墳がある。
- 写真北東部の集落は、その東側地下に中島上吉氣遺跡が眠っている中島村。



巻頭図版3　揖保川流域における3～4世紀の遺跡分布図

1.岩見北山積石塚1号墓　2.岩見北山積石塚4号墓　3.荒神山古墳(消滅)　4.綾部山39号墓　5.奥塚古墳　6.武山古墳
7.オノ木遺跡　8.山王山古墳　9.権現山105号墓　10.権現山51号墳　11.権現山50号墳　12.権現山梶山14号墳
13.龍子三ツ塚1号古墳　14.養久山1号墳　15.養久山5号墓　16.養久山32号墓　17.養久山18号墳　18.景雲寺山古墳
19.白鷺山弥生墳丘墓　20.松田山古墳　21.鷲山古墳　22.黒岡山墳墓　23.丁瓢塚古墳　24.山戸4号墳



巻頭図版4　揖保川流域における5～6世紀の遺跡分布図

1.将軍塚古墳（綾部山1号墳）　2.綾部山古墳群　3.綾部山14号墳　4.綾部山29号墳　5.朝臣4号墳　6.朝臣5号墳
7.朝臣7号墳　8.朝臣3号墳　9.朝臣古墳群　10.オノ木遺跡　11.小丸山古墳　12.綻岩馬道古墳群　13.権現山古墳群
14.黍田古墳群　15.塚森古墳　16.窟纏塚古墳　17.片鳥古墳群　18.タイ山古墳群　19.西宮山古墳
20.檀特山東1号墳　21.檀特山西5号墳　22.檀特山西8号墳　23.檀特山1号墳　24.朝日山1号墳　25.丁古墳群
26.丁山頂古墳　27.鍛冶田遺跡　28.前田遺跡　29.鵤石田遺跡

巻頭図版5　みはらしの森　案内図

- 平成23年（2011年）3月11日にみはらし会が作成し、この案内図を利用して、散策や木の実拾いを実施している。
- なお、この地図はインターネットで公開している。

碇岩大池（西北西）より

御津霊園（西南西）より

「神功皇后渡航説話」の中に、この地に停泊したとの逸話がある。
伊和神社鳥居下にある岩は、その時に、とも綱を結びつけたとの伝説がある「碇岩」である。

巻頭図版6　朝臣山の遠望

序　文

朝臣（あさとみ）山古墳群の存在する、たつの市御津町は、兵庫県の南西部播磨平野の西端に位置し、平成17年（2005年）10月に旧揖保郡の御津町・揖保川町・新宮町と旧龍野市との合併により、新生、たつの市となった。たつの市には宍粟市の藤無山（標高1139m）を水源とする一級河川の揖保川が瀬戸内海へと（総延長69.736km）流れ注ぎ、古く『播磨国風土記』には揖保郡（いいほのこおり）の宇頭川（うずがわ）と呼ばれ、その河口西に位置するのが御津町である。

御津町は、東西9.14km・南北5.98kmの17.97km²の面積に及び、西部海岸線に沿って東西に細長い旧室津村と、東部は台形状の広がりを有する旧御津村の二つの地域で構成されている。室津地域（旧室津村）は、古代より近現代まで良港として栄え続けた室泊（むろのとまり）を擁する。とくに近世には日本を代表する港町であり、北前船の海路と参勤交代の陸路を結ぶ宿場町として栄えた。現在は兵庫県の景観形成地区に指定され、昨年には日本遺産に追加登録となった。

一方、御津地域（旧御津村）は室津地域と異なり、弥生時代後期末から古墳時代終末期にかけて弥生墳墓・古墳・古墳群が450年間に渡り連綿と造られており、日本列島でも稀な地域で、その時代の研究においては欠かせない場所である。室津港が栄える前は御津村西端の岩見港（伊津・御津）が拠点と考えられる。岩見坂（標高66m）を越えると揖保川町河内の平野部（田園）に至る。また東方面へは三つの山塊（権現山・朝臣山・綾部山）が揖保川手前まで伸び、山塊の間の二つの平野の南側は現在町の中心部となっているが、海抜が低く（1～4m）古墳時代は海水が入り込む潟湖（ラグーン）で内海であったと考えられる。

平成6年（1994年）度から平成8年（1996年）度に御津町内の分布調査が行われ『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』には363ヶ所の遺跡が報告されている。内、310ヶ所が弥生墳墓・古墳（前期・中期・後期・終末期）であり、分布調査後も多くの発見があった。朝臣4号墳と朝臣5号墳は、分布調査時にあらゆる角度から観察し別個として登録したが、その後に観察を繰り返し、前方後円墳である可能性を考えた。それを実証する目的で、測量を行った。尚、南に位置する朝臣7号墳も測量することとした。私事ではあるが、これらの古墳との出会いは51年前（1969年）であり、その頃、表採した埴輪片なども合わせ報告する。また旧御津村に関し、過去に報告書等が多く出されているが、一般の人々の目に触れる事が少ないと思われ、概要を列記し、さらに未報告並びに最新情報も記載した。参考にしていただきたい。ところで、昨年7月、百舌鳥・古市古墳群が世界遺産になった。なんと49基の古墳が一括登録である。御津地域の古墳群（岩見・権現山・朝臣山・綾部山）も一括で古墳の町のシンボルとして、まずは、たつの市の文化財指定を希望する。文化財保護は勿論だが、市民の皆さんへ浸透していき、今後の活用が心豊かな町つくりに繋がることを信じている。尚、調査に当たり地元自治会（加家・朝臣・綛岩・栄町・中島・山王）の皆様はじめ、関係機関及び関係者の皆様に深く感謝申し上げるとともに、先祖が残してくれた足跡である文化財の保存と、今後における活用を切に願っている。

令和2年（2020年）10月

みはらし会　考古部会　　萬代 和明

例　言

1. 本書は、旧揖保郡御津町の『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』にある、朝臣4号・5号墳と7号墳の平板測量の報告である。各古墳の位置する場所は、たつの市御津町碇岩字前山（4号・5号墳）と朝臣字魔ノ原（7号墳）である。

2. 事前の資料集め（法務局・県民局・たつの市）等は、原田 一博（郷土史家）・萬代 和明（みはらし会 考古部会・ひょうご考古楽倶楽部員）が行った。

3. 測量場所の伐採は、みはらし会（塚本 敏昭会長）メンバーと各自治会代表など総勢25名で行った。自治会：加家・朝臣・碇岩・栄町・中島・山王、たつの市御津支所：地域振興課職員

4. 測量道具は、4名の個人並びに一企業より拝借した。

5. 測量のための基準点は、前山山頂三角点103.5mより4号・5号墳は14ヶ所、7号墳（山頂　86.5m）は4ヶ所設定した。

6. 朝臣4号・5号墳の平板測量は縮尺1/200・等高線50cm、7号墳は縮尺1/200・等高線25cmとした。
   平板測量は下記のメンバーにて行った。
   中溝 康則（日本考古学協会員）・原田 ・辻本 宰・萬代・渡辺 昇（日本考古学協会員）・田路 守・川人 弘之　の7名　※年齢順

7. 表面採取遺物は、中溝・田路・原田・萬代が採取したものを集約した。

8. 遺物（埴輪片・須恵器片など）の実測・製図は白谷 朋世（日本考古学協会員・文化財保存全国協議会常任委員）が行い、拓本は萬代が採った。写真は白谷・萬代が指導し、尾村 幸男が撮った。

9. 本書で使用した地図は、国土地理院発行1/25,000の地形図「網干」「龍野」及びカシミール3Dである。

10. 上空からの写真撮影は道本 剛司に依頼し、パノラマは萬代が指導し、尾村が編集した。
    遺跡などの現地写真は、沖田明信と白谷・萬代が撮影した。

11. 施工前の地形などを確認するため、4号墳内にある特別高圧線の鉄塔について関西電力（株）姫路電力所に確認したところ、1959年（昭和34年）12月建設だが当時の施工資料はなかった。

目 次

巻頭図版…… Ⅰ
序　文……（萬代 和明）…… Ⅶ
例　言……（萬代）…… Ⅷ

第１章　位置と環境
第１節 全国から見た兵庫県の遺跡と地質……（萬代）…… 1
第２節 揖保川流域の地理的環境……（萬代）…… 6
第３節 御津地域の字と遺跡名……（石黒 始）…… 7
第４節 周辺の遺跡……（萬代）…… 11
第５節 『風土記』にみえる揖保郡……（石黒）…… 18
第６節 朝臣地区の古墳……（白谷 朋世）…… 22

第２章　揖保川下流域の古景観
第１節 網干デルタの古景観―砂礫をめぐって―……（石黒）…… 33
第２節 近世・近代の地図資料（17～20世紀）から推定される河道と汀線及び道……（石黒）…… 46
第３節 まとめ……（石黒）…… 52

第３章　調査に至る経緯と経過
第１節 御津町の遺跡調査履歴……（萬代）…… 56
第２節 調査日誌……（田路 守）…… 65

第４章　墳丘の測量
第１節 平面図……（原田 一博）…… 66
第２節 断面図……（原田）…… 69

第５章　表面採取遺物
第１節 遺物の採取状況……（萬代）…… 71
第２節 土師器・須恵器……（白谷）…… 73
第３節 埴輪……（白谷）…… 76
第４節 鉄器……（萬代）…… 92

第６章　考察と紹介
第１節 須恵器・埴輪からみた朝臣4号・5号・7号墳……（白谷）…… 96
第２節 古墳築造工事の目安……（原田）…… 103
第３節 近接する2基の古墳と近年発見された前方後円墳……（萬代）…… 106

第７章　総　括
第１節 本報告書のまとめ……（萬代）…… 112
第２節 旧御津村の4地区の特徴……（萬代）…… 114
第３節 あとがき……（萬代）…… 116

最後に……（塚本 敏昭）…… 118

写真集 …… 119

報告書抄録…… 125

挿図・表・コラム 目次

挿図

巻頭図版1　1961年当時の旧御津村の航空写真
巻頭図版2　1961年当時の旧御津村朝臣近辺の航空写真
巻頭図版3　揖保川流域における3～4世紀の遺跡分布図
巻頭図版4　揖保川流域における5～6世紀の遺跡分布図
巻頭図版5　みはらしの森　案内図
巻頭図版6　朝臣山の遠望

第１章
図1　律令時代の兵庫
図2　西播磨の地質図
図3　たつの市「赤とんぼ荘」より揖保川下流域を望む
図4　御津町大字位置図
図5　旧御津村の小字図
図6　揖保川流域を中心とした墳墓・古墳編年（2020年）
図7　「風土記」における揖保郡の里
図8　伊能忠敬測量前網干地区説明図　船越拡大図
図9　朝臣1号墳舟形石棺図
図10　1996年段階の朝臣山古墳群分布図（1度目）
図11　2004年段階の朝臣山古墳群分布図（3度目）
図12　碇岩馬道7号墳　小型低方墳

第２章
図1　石見神社社記による揖保川の変遷図
図2　揖保川流路変遷の概要図
図3　推定旧流路と弥生前期遺跡
図4　水月湖年縞堆積物の菱鉄鉱、方解石含有変動（海水準変動）
図5　仙台平野の砂堆列
図6　東京湾南東岸の砂堆列
図7　九十九里浜の砂堆列（北半分を図示）
図8　天満の砂堆列と発掘調査地点
図9　揖保川下流平野の地形環境
図10　砂堆形成の機構推定
図11　第5砂堆を考慮した砂堆配列
図12　文献に示された網干デルタの地名
図13　寛延二年　播磨国細見図
図14　江戸期～明治期の汀線と河川流路（推定）
図15　伊能忠敬測量前網干地区説明図
図16　伊能忠敬測量前網干地区説明図　奥浜・新在家拡大図
図17　中・近世～明治中期の網干デルタ景観
図18　明治中頃の網干周辺の地形図
図19　神功皇后渡航経路の推定　経路1と経路2
図20　網干デルタ古景観の復元模索と遺跡分布－砂堆をめぐって－

第３章
図1　前山古墳群の紹介文
図2　御津町岩見地区の遺跡分布調査参加者記念写真
図3　権現山51号墳墳丘測量図
図4　権現山51号墳主体部遺物出土状況
図5　小丸山古墳出土の装飾付須恵器
図6　碇岩南山A地点石器ブロック図
図7　碇岩南山瓦窯出土の軒丸瓦
図8　碇岩南山瓦窯の検出状況
図9　前方後方形の岩見北山積石塚4号墳墓墳丘測量図
図10　釜屋遺跡の塩田遺構検出状況
図11　2000年段階の朝臣山古墳群（2度目）と周辺古墳の分布図
図12　綾部山39号墓出土の画文帯神獣鏡
図13　発掘調査中の綾部山39号墓の主体部

第４章
図1　朝臣7号墳平面図（縮尺1/400）
図2　朝臣4号・5号墳平面図（縮尺1/400）
図3　朝臣4号・5号墳断面図（縮尺1/400）

第５章
図1　1996年分布調査時の4号墳の墳輪確認状況
図2　4号・5号墳遺物表採場所
図3　7号墳遺物表採場所
図4　1996年分布調査時の4号墳採取墳輪（S：1/5）
図5　4号・5号墳採取土師器・須恵器実測図（S：1/4）
図6　4号・5号墳採取土師器・須恵器写真
図7　4号墳採取墳輪実測図（S：1/4）
図8　4号墳採取墳輪外面写真
図9　4号墳採取墳輪内面写真
図10　5号墳採取墳輪実測図（S：1/4）
図11　5号墳採取墳輪外面写真（1）
図12　5号墳採取墳輪内面写真（1）
図13　5号墳採取墳輪外面写真（2）
図14　5号墳採取墳輪内面写真（2）
図15　7号墳採取須恵器・墳輪実測図（S：1/4）

図16　7号墳採取須恵器・埴輪外面写真
図17　7号墳採取須恵器・埴輪内面写真
図18　採取地点不明埴輪実測図（S：1/4）
図19　採取地点不明埴輪写真
図20　採取埴輪小片写真
図21　須恵器クシ描き文拓影（S：2/3）
図22　鉄器現状写真
図23　鉄器レントゲン写真（平面）
図24　鉄器レントゲン写真（側面）

第6章
図1　鈴木一有　百舌鳥・古市古墳群を中心とした埴輪の変遷（2014年）
図2　才ノ木遺跡の壺・器台
図3　蟻無山1号墳の器台
図4　宿禰塚古墳の台付壺
図5　古墳の築造に関わる縦断図面
図6　古墳の築造に関わる位置図
図7　綾部山古墳群古墳分布図
図8　綾部山古墳群2号・3号墳測量図
図9　綾部山古墳群11号・12号墳測量図
図10　綾部山古墳群13号・14号墳測量図
図11　養久山12号・13号墓測量図
図12　中山13号墳測量図
図13　放亀山1号墳3次元モデル
図14　甲崎古墳紹介文
図15　武山古墳地形図
図16　原山古墳位置図

第7章
図1　中期古墳の階層構成の諸類型

最後に
図1　森 浩一先生直筆の写真

表
第1章
表1　平成28年度の埋蔵文化財関係統計資料
表2　兵庫県の墳墓・古墳の特徴
表3　播磨の地区別全遺跡数と古墳数並びに埴輪を伴う古墳
表4　播磨の埴輪を伴う古墳の形状と規模
表5　揖保郡御津町小字表

第2章
表1　各調査地点の年代
表2　遺跡表

第3章
表1　播磨国郷村高表に記載されている各村の村高

第5章
表1　4号・5号墳採取土師器・須恵器観察表
表2　4号墳採取埴輪観察表
表3　5号墳採取埴輪観察表
表4　7号墳採取須恵器・埴輪観察表
表5　採取地点不明埴輪観察表
表6　採取埴輪小片観察表

コラム
コラム1　文中の「小型低方墳」について
コラム2　見比べてみたい西播磨の須恵器
コラム3　西播磨（御津地区）「地域首長」とヤマト「畿内首長」

第１章　位置と環境

第１節　全国から見た兵庫県の遺跡と地質

全国には多くの遺跡が存在する。過去に開発に伴い消滅した遺跡、開発により新規発見された遺跡、そして遺跡公園に再現され人々の憩いの場所として利用されている遺跡もある。このような遺跡は、各都道府県より毎年「埋蔵文化財」として資料提示され、文化庁が統計資料を作成している。ここでは、全国の中で一番遺跡が多い兵庫県と播磨の古墳・地質を中心に紹介する。

１）平成28年（2017年）度「埋蔵文化財関係統計資料」文化庁資料より

表1　平成28年度の埋蔵文化財関係統計資料（2017年度）

項　目	全 国	兵庫県	備　　考
総遺跡数	468,835	28,761（1位）	2位：千葉県（27,629）、3位：福岡県（23,758）
集落跡・散布地	193,567	5,249（12位）	1位：北海道（10,977）、2位：千葉県（10,267）
古墳	159,636	18,851（1位）	2位：鳥取県（13,486）、3位：千葉県（12,765）
城館跡	35,829	1,315（4位）	1位：福島県（2,348）、2位：広島県（1,556）
社寺跡	10,590	647（4位）	1位：福岡県（1,018）、2位：滋賀県（701）
生産遺跡	23,210	1,583（3位）	1位：愛知県（3,603）、2位：島根県（2,412）
貝塚	3,955	12（23位）	1位：千葉県（744）、2位：茨城県（376）

備考1：古墳の件数は、市町村によっては群集墳をワンカウントとしているケースあり。
備考2：データは消滅した遺跡・古墳・社寺跡・城館跡も含まれている。
備考3：都会では古くに破壊され記録にないケースが想定される。
備考4：特に未開発地域は、今後新たに遺跡が見つかる可能性がある。
備考5：城館跡のカウントは、兵庫県内の市町村で、付城も含めワンカウントとしているケースもある。
（渡辺 昇氏教示）

まず、兵庫県には遺跡が多い。加えて特徴ある遺物もある。

・銅鐸：南あわじ市の松帆銅鐸（7個）発見で67個となった（全国では約520個）。

・石棺：高砂市に“竜山石”の石棺の産地があり、県外でも多く採用されている。

２）古代兵庫の特徴

律令時代の兵庫（図１）を見てみると、兵庫県は北は日本海、淡路島の南は太平洋に面し、中下には瀬戸内海があり、列島の西から東・東から西への海路、南北の陸路、何れにおいても兵庫県を通過しないといけない位置にあり、移動に対しての結節点となっている。そのことにより遺跡の数が最も多くあるのではと考える。

古代兵庫については、古墳時代の後にできた律令国家が定めた国・郡・里に区分されるので、その区分を遡って語る事とする。それによると兵庫は5つの国（但馬・丹波・摂津・淡路・播磨）となり、今回測量した古墳は大国である播磨国に位置する。現在、播磨国は四つに区分（東・北・中・西）され、揖保川の下流に位置するたつの市御津町（旧御津村）は西播磨にある。

『播磨国風土記』によると播磨には12の郡（明石・赤穂は本文が欠落。但し明石郡と認められる逸文あり）があり、その中の揖保郡にある18の里の内、太子町と姫路市西部を含めて御津（旧御津村）

は石海里に含まれる。ただし、一番西に位置する岩見（岩見港）は家島諸島も含めて浦上里と考えられている。

尚、播磨の『風土記』・古墳の詳細は、地元の研究者が書いた、① 是川 長　2011『播磨国風土記のひみつ』　神戸新聞総合出版センター、② 岸本 道昭　2013『古墳が語る播磨』　神戸新聞総合出版センター等をお勧めする。

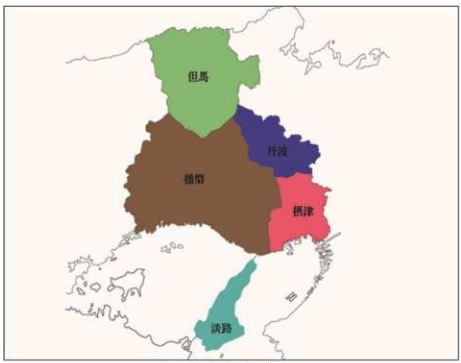


図1　律令時代の兵庫

次に、兵庫五国の墳墓・古墳について述べる。先の表1にある全国埋蔵文化財関係統計資料では、総遺跡数は兵庫県が全国1位（28,761件/468,835件中）だが、古墳の数も1位（18,851件/159,636件中）であり、その中でも五国で地域性がある。その特徴について少し表2にまとめている。

表2　兵庫県の墳墓･古墳の特徴

地 区	墳墓・古墳の数	地区での特徴
但 馬	9,124 (48.4%)	日本海を介し中国・朝鮮半島から見て、当時の玄関口にあたり、弥生墳墓・古墳が尾根に階段状に多く築かれている。
丹 波	2,168 (11.5%)	京都府にまたがるが、小型の前方後円墳が多く、北部は但馬と同様尾根に階段状に築かれている。全長140mの雲部車塚古墳が存在。
摂 津	1,150 (6.1%)	畿内の一国で、前期の西求女塚古墳・東求女塚古墳・処女塚古墳が著名である。消滅した全長200mの念仏山古墳が惜しまれる。
淡 路	151 (0.8%)	弥生時代の銅鐸が県内67個中26個出土しているが、古墳の築造は少ない。前方後円墳は現在のところ見つかっていない。
播 磨	6,258 (33.2%)	河川ごとに多くの古墳が築造されていて、中流から下流に集中し時期もバラエティーに富む。特に揖保川下流域の旧御津村は弥生墳墓・古墳の宝庫である。東端には五色塚古墳が存在する。

３）播磨の地区別全遺跡数と古墳数並びに埴輪を伴う古墳

参考資料：髙代和明　2017年1月25日「播磨地方の埴輪を伴う古墳」『第3回　考古・歴史研究発表会』〈ひょうご考古楽倶楽部　2016年度例会資料〉

表3　播磨の地区別全遺跡数と古墳数並びに埴輪を伴う古墳

地 区	市町別	全遺跡数	内古墳（A）	埴輪を伴う古墳（B）	B/A
東播磨	神戸市（一部）	391	78	22	28.2％
	明石市	328	25	3	12.0％
	加古川市	639	302	13	4.3％
	高砂市	69	37	2	5.4％
	稲美町	38	5	0	0％
	播磨町	15	1	1	100％
	小　計	1,480	448	41	9.2％
中播磨	姫路市	1208	629	25	4.0％
	神河町	42	24	0	0％
	市川町	87	27	0	0％
	福崎町	136	40	1	2.5％
	小　計	1,473	720	26	3.6％
北播磨	西脇市	1,004	632	6	0.9％
	三木市	930	464	5	1.1％
	小野市	585	414	5	1.2％
	加西市	851	373	32	8.6％
	加東市	743	445	5	1.1％
	多可郡	653	327	0	0％
	小　計	4,766	2,655	53	2.0％
西播磨	相生市	231	91	15	16.5％
	たつの市	1,799	1,381	35	2.5％
	赤穂市	339	210	6	2.9％
	宍粟市	506	180	2	1.1％
	太子町	232	150	5	3.3％
	上郡町	293	186	3	1.6％
	佐用町	418	105	0	0％
	小　計	3,818	2,303	66	2.9％
播磨	合　計	11,537	6,126	186	3％

備考1：神戸市（一部）と明石市は群集墳をワンカウントとしている為、埴輪を伴う古墳の比率が高くなっている。

備考2：古墳の数並びに埴輪を伴う古墳は、たつの市が総数で一番多い。特に揖保川流域の御津地域に集中する。

備考3：埴輪を伴う古墳の比率は播磨全体では3%だが、他地方の一例として、古墳時代の前期から後期の群集墳である宮崎県の西都原古墳群（約300基）では埴輪を伴う古墳数は8基の2.67%である。（犬木 努氏 2015年播磨考古学研究集会にて教示）

４）播磨の地区別埴輪を伴う古墳の形状と規模

参考資料：表３と同様

表4　播磨の埴輪を伴う古墳の形状と規模

			方墳	円墳	帆立貝	前方後方	前方後円	不明	計
形状（判明分のみ）		東播磨	2	18	7	0	8	6	41
		中播磨	0	12	0	0	5	9	26
		北播磨	8	32	5	0	7	1	53
		西播磨	5	37	6	2	8	8	66
		播　磨	15	99	18	2	28	24	186
規模（判明分のみ）	東播磨	20m以下	2	9					11
		20～40m		5	5				10
		40～100m		4	2		7		13
		100以上					1		1
	中播磨	20m以下		4					4
		20～40m		3			2		5
		40～100m		1			1		2
		100以上					2		2
	北播磨	20m以下	7	13					20
		20～40m	1	13	3		1		18
		40～100m		5	2		5		12
		100以上					1		1
	西播磨	20m以下	2	15					17
		20～40m	2	6	2		4		14
		40～100m			3	2	3		8
		100以上					1		1
	播　磨	20m以下	11	41					52
		20～40m	3	27	10		7		47
		40～100m		10	7	2	16		35
		100以上					5		5

備考1：表3･4は、平成28年（2016年）2月に行われた第17回播磨考古学研究集会の資料と、兵庫県教育委員会　2011年『兵庫県遺跡分布地図』第2分冊　の資料を基に、萬代が作成した。

備考2：埴輪を伴う古墳の比率は3%であるが、上表を見ると形状・規模に関係なく存在する。

備考3：前方後方墳・前方後円墳に絞ると、前方後方墳（2/15基13.9%）、前方後円墳（8/67基11.9%）となる。

備考4：埴輪を伴う古墳の築造時期は、古墳時代前期から後期前半で、ピークは古墳時代中期である。

備考5：埴輪の起源となる、特殊器台・特殊壺を持つ古墳も含まれる。

備考6：第6章第3節4）放亀山1号墳・5）甲崎古墳・6）仮称：武山古墳（武山城跡）・7）仮称：原山古墳は上表にはカウントしていない（現状では埴輪確認は武山古墳のみ）。全て前方後円墳である。

備考7：表4の形状と規模で数が合わないのは、形状は判明しているもののみをカウントしているためである。

５）西播磨の地質図

昭和36年（1961年）の『兵庫県地質鉱産図』郷土振興調査会　兵庫県地質図作成委員会　より西播磨の地質図を引用すると、地質は大きくは5つに分けられる。

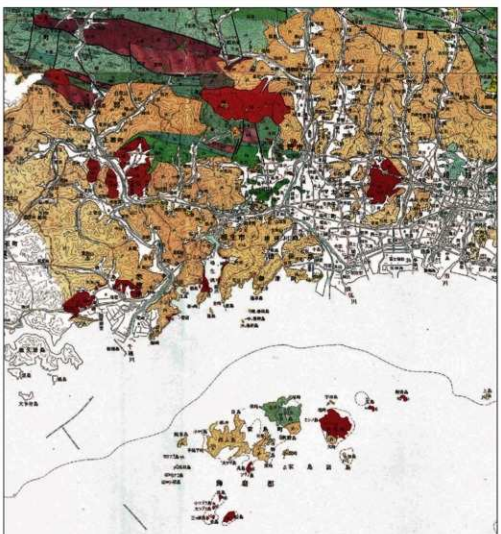


図2　西播磨の地質図

● a（白色）現世、現世層、砂・レキ・粘土及び崖錐　● hG（赤色）白亜紀後期～古第三紀火成岩帯、広島型花崗岩類、花崗岩・花崗閃緑岩　● yL（肌色）　白亜紀後期～古第三紀火成岩帯、矢田川・生野・有馬層群、流紋岩及びその凝灰岩層、流紋岩・緑色片岩類　● sh（うす青色）新古生代、古生層、頁岩層・粘板岩（砂岩）　● ph（黄みどり色）新古代、内帯の変成古生層、千枚岩層

考古学と程遠い時代の地質を記載したが、人類の生い立ちを研究する考古学においても、地質は大いに参考になると思い、全くの素人であるが資料を紹介した。

特に、旧石器・縄文・弥生・古墳…各時代の海水面変動を知りたいため紹介した次第だが、序文でも述べているように、図2の横書きの「揖保郡」の「保郡」の文字がかかっている山塊北側の「中島」の西の田園地帯や、南側の「朝臣・苅屋・釜屋」付近の二つの平地は、当時は入江と考えており、堆積した地面下層から時代が推測できれば、それぞれの時代の姿を想定できるだろう。考古学は科学の一分野だが、科学はたくさんの専門分野があり、それらの分野がコラボし研究すれば、より疑問が解けると思っている。

第２節　揖保川流域の地理的環境

兵庫県の南西部播磨平野の西側に、宍粟市の藤無山を水源とする一級河川の揖保川が流れている。宍粟市からたつの市内を北から南に流れ、瀬戸内海（播磨灘）に注ぐことで総延長69.736kmの流れが終わる。その下流域、河口右岸に位置するのがたつの市御津町であり、その海岸は東部と西部で様相が異なる。

東部は揖保川が運んだ砂によって遠浅の浜が広がり、揖保川左岸の網干デルタ（第2章参照）を経て播磨平野まで続くが、西部は入り組んだリアス式海岸が遠く中国地方まで続いている。又、陸路は、古代山陽道・中世山陽道・近世山陽道と各時代を通じて東西を往来する人々が必ず通る場所であり、海路においても拠点となる津（港）が存在する。加えて、揖保川とその支流を北へ遡ると、但馬や美作さらには因幡へと通ずる。

図3は、古代山陽道の北側山上にある国民宿舎の赤とんぼ荘より見た揖保川下流の風景である。揖保川の右岸には、南から順に、平成の大合併前の御津町、揖保川町、龍野市、新宮町が位置する。この右岸には、東西に連なる比較的低い山塊（標高200m以下）が何列も並んでおり、流域の平野は余り広くないが、その山塊には多くの弥生墳墓・古墳が築かれている。御津町については、相生市から続く三本の山塊（南から、綾部山・基山・武山、前山・雛山・朝臣山、権現山）があり、図3の中央奥まで権現山が延びている。尚、古墳が築かれた当時は、御津町のかなりの部分に海が入り込み、平地は極めて僅かであったと想定できる。

一方、揖保川左岸は姫路市や太子町で、単独の小山はあるが、長い時をかけ揖保川が運んだ土砂（砂鉄含む）で作られた平野が広がっている。弥生時代や古墳時代の汀線は現在の海岸より4km以上上流であったと考えられるが、弥生時代からの集落遺跡が多く存在する。但し、古墳時代の揖保川は現在より東側を流れていた（第2章参照）ので、流路の移動によって集落遺跡が失われてしまった可能性がある。つまり、平野は集落遺跡の宝庫、山塊は墳墓・古墳の宝庫で、山塊は各集落の人々や、瀬戸内海を行き来する人々の墓地地帯（墓域）とも考えられるのである。

このように、古くから人の交流があって、四季を通じて過ごしやすい気候に恵まれた揖保川流域には、現在もたつの市域を中心に、揖保川の清流がもたらした薄口醤油や素麺（揖保乃糸）作りが続いているのである。

図3　たつの市「赤とんぼ荘」より揖保川下流域を望む

第３節　御津地域の字と遺跡名

１）小字とは

「大字」は明治22年（1889年）に公布された市制や町村制施行時に従前の村名・町名を残したものである。「小字」はその村々の中の細かい集落や耕地を指す地名で、考古学においては、「小字」を遺跡名として利用しているケースが多い。又、「小字」はその地域の地名伝承と触れ合うものである。しかし、近年この「小字」を巡る行政的な取り扱いに大きな変化が生じており、全国的にも「公図」に代わる「地籍図」再編、市町村合併、住居表示等の実施によって「小字」が行政上の地位を失い、日常生活から姿を消しつつある。これは、「生活の便」といって片付けられるものではないので、この問題点について簡単に触れておく。

まず、特定場所の指定と呼称に関する二重性である。現在、「地番」＝「住居表示」ではない。昭和37年（1962年）に施行された「住居表示に関する法律」によって、従来の「地番」と「住居表示」は切り離された。同一場所を表示するのに、不動産取引時などで使用されるのは「地番」であり、郵便や運転免許証に使用するのは「住居表示」である。「地番」は登記所（法務局）が、「住居表示番号」は市町村が定めるもので、「住居表示番号」の使用によって多くの場合「小字」は使用されなくなっている。現行の地形図などでは「小字」は使用されず、多くの場合「大字」何丁目何番地の表示になっている。

更に、「小字」とそこに含まれる一筆耕地を基本とした「公図」は、その不確かさから新たに精度よく測量された「地籍図」に置き換えられつつある。「地籍図」に地域の財産ともいうべき「小字」が盛り込まれていない場合は、地域が本来持っていた「小字」を伝える術が失われている。したがって、「小字」と新たに作成される「地籍図」の紐づけは地名伝承にとって重要なことである。

我が御津町においても同様であるため、基礎資料として御津町の「大字」（図4）、「小字」を紹介する（表5・図5）。尚、下表に示す資料の出典は、平成4年（1992年）に田中 早春氏が兵庫県地名研究会（落合重信　代表）から依頼を受け、独自の方法で採集、聞き取りを進められた『揖保郡太子町御津町小字地名集』である。これによると、御津町には朝臣をはじめとする8村の「大字」（朝臣・碇岩・岩見・苅屋・釜屋・黒崎・中島・室津）があることがわかる。

２）御津町の8村の小字

表5　揖保郡御津町小字表

大字	小字
朝臣（あさみ）	浅地（あさじ）、魔ノ原（あんのはら）、上ノ山（うえのやま）、加家（かけ）、北ノ坊（きたのぼう）、五反田（ごたんだ）、才ノ木（さいのき）、庄ノ内（しょうのうち）、大覚寺（だいかくじ）、朝日田（ついたちでん）、辻（つじ）、堤添（つつみぞえ）、幡ノ手（のぼりのて）、橋本（はしもと）、樋ノ口（ひのぐち）、万燈（まんとう）、宮ノ上（みやのうえ）、宮ノ前（みやのまえ）、妙泰（みょうたい）、山崎（やまさき）、山田ノ上（やまだのうえ）、山田ノ前（やまだのまえ）
碇岩（いかりいわ）	赤坂（あかさか）、朝地（あさじ）、ウズ輪（うずわ）、馬道（うまみち）、落町（おちまち）、小畑（おばたけ）、大町（おまち）、北池尻（きたいけじり）、北下モ（きたしも）、北畑（きたばたけ）、北山（きたやま）、荒田荒谷（こも

	だあらたに）、地獄谷剌山（じごくだにそりやま）、砂田（すなだ）、塚黒（つかぶろ）、西池（にしいけ）、西畑（にしばたけ）、年貢山（ねんぐやま）、東畑（ひがしばたけ）、前山（まえやま）、南池尻（みなみいけじり）、南下モ（みなみしも）、南山（みなみやま）、南畑（みなみばたけ）、宮山（みややま）
岩見（いわみ）	油田（あぶらでん）、池尻（いけじり）、池田（いけだ）、石浦大谷（いしうらおおたに）、岩鼻（いわばな）、上ノ山（うえのやま）、家ケ浜（えがはま）、蛭子ノ本（えびすのもと）、奥ノ池（おくのいけ）、ヲサル（おさる）、カイノ本（かいのもと）、鍵町（かぎまち）、神ノ木（かみのき）、北峠（きたとうげ）、北山（きたやま）、下前田（げまえだ）、源次郎（げんじろう）、清水（しみず）、新地（しんち）、立筴（たておさ）、玉ノ上（たまのうえ）、出口（でぐち）、中新田（なかしんでん）、中谷（なかたに）、西家ノ上（にしいえのうえ）、西大門（にしだいもん）、西立通（にしたてどおり）、西谷（にしたに）、西畑（にしばたけ）、西溝ケ谷（にしみぞがたに）、乗越（のりこし）、八講田（はっこうでん）、浜屋敷（はまやしき）、東家ノ上（ひがしいえのうえ）、東立通（ひがしたてどおり）、東ノ町（ひがしのちょう）、東ノ前（ひがしのまえ）、東溝ケ谷（ひがしみぞがたに）、福田（ふくでん）、前田（まえだ）、南新田（みなみしんでん）、南峠（みなみとうげ）、宮ノ下（みやのした）、三山尻（みやまぜ）、ムカイ（むかい）、向山（むかいやま）、藪ノ内（やぶのうち）、横田（よこた）、横枕（よこまくら）
苅屋（かりや）	戊新畑（いぬしんばた）、内畑（うちばた）、内町（うちまち）、午新屋敷（うましんやしき）、裏ノ田（うらのた）、大新田（おおしんでん）、大溝筋（おおみぞすじ）、上新田（かみしんでん）、上中道（かみなかみち）、川替堤内（かわがえつつみのうち）、剣先（けんさき）、荒神田（こうじんだ）、五反田（ごたんだ）、狐田（こもだ）、近藤新田（こんどうしんでん）、桜垣内（さくらがいち）、塩田（しおだ）、自在講（じざいこう）、地蔵堂（じぞうどう）、下中道（しもなかみち）、白屋（しろや）、下村境（しもむらさかい）、新田川原（しんでんかわら）、砂田（すなだ）、扇子田（せんすだ）、大正畑（たいしょうばた）、長十郎洲（ちょうろす）、塚町（つかまち）、堤外（つつみのそと）、富島（とみしま）、中川大畑（なかがわおおはた）、中川新田（なかがわしんばた）、中洲（なかす）、中ノ田（なかのた）、成山新田（なりやましんでん）、子畑（ねばた）、西新田（にししんでん）、西屋敷（にしやしき）、西藪ノ下（にしやぶのした）、信ス田（のぶすだ）、八反田（はったんだ）、浜新田（はましんでん）、東屋敷（ひがしやしき）、東藪ノ下（ひがしやぶのした）、樋ノ口（ひのぐち）、姫路屋畑（ひめじやばた）、歩溜（ぶどめ）、歩溜ノ下（ぶどめのした）、ヘラ町（へらまち）、本道ノ下（ほんみちのした）、前新田（まえしんでん）、真蒜原（まこもはら）、松ノ木新田（まつのきしんでん）、神子田（みこだ）、門田（もんでん）
釜屋（かまや）	掛下り（かけさがり）、北浜新田（きたはましんでん）、寅浜新田（とらはましんでん）、長通り（ながどおり）、西寅浜新田（にしとらはましんでん）、東新田（ひがししんでん）、南新田（みなみしんでん）
黒崎（くろさき）	綾部（あやべ）、綾部下（あやべした）、池ノ上（いけのうえ）、池ノ戸（いけのと）、磯浦（いそうら）、岩端（いわばな）、折敷谷（おしきだに）、上綾部（かみあやべ）、唐崎（からさき）、北居屋敷（きたいやしき）、北塩浜（きたしおはま）、切戸（きりど）、北前田（きたまえだ）、外前田（そとはまだ）、武山（たけやま）、中塩浜（なかしおはま）、西塩浜（にししおはま）、西新田（にししんでん）、西浜（にしはま）、羽子ノ上（はごのうえ）、狭間谷（はざまだに）、東綾部（ひがしあやべ）、東塩浜（ひがししおはま）、東武山（ひが

	したけやま）、東浜黒（ひがしはまぐろ）、東基山（ひがしもとやま）、福徳（ふくとく）、前田（まえだ）、丸山（まるやま）、万燈（まんとう）、南居屋敷（みなみいやしき）、南岩端（みなみいわばな）、南塩浜（みなみしおはま）、南西浜（みなみにしはま）、南基山（みなみもとやま）、向山（むかいやま）、室岩（むろいわ）、基山（もとやま）
中島（なかしま）	石ケ坪（いしがつぼ）、戌亥田（いぬいだ）、岩崎（いわさき）、王子（おうじ）、王子越（おうじごえ）、鍵田（かぎだ）、鍛冶山（かじやま）、上山王（かみさんのう）、上吉氣（かみよしげ）、川原（かわら）、北山（きたやま）、此ノ坪（このつぼ）、此ノ間（このま）、下山王（しもさんのう）、下吉氣（しもよしげ）、仙足（せんそく）、丁田（ちょうだ）、突田（つくだ）、燈明田（とうみょうでん）、西前田（にしまえだ）、博塚（ばくつか）、八反田（はったんだ）、藤ノ木（ふじのき）、本無（ほんなし）、前田（まえだ）、魔谷（またに）、南山（みなみやま）、南吉氣（みなみよしげ）、宮ノ西ラ（みやのにしら）、宮ノ前（みやのまえ）、横枕（よこまくら）
室津（むろつ）	尼谷（あまや）、荒戸（あらと）、池ノ浜（いけのはま）、壱丁目（いっちょうめ）、大浦（おおうら）、沖ノ唐荷（おきのからに）、奥長老ケ谷（おくのちょうろうがたに）、小浜（おばま）、柏（かしわ）、方越（かたこし）、金崎（かなさき）、亀ノ甲（かめのこう）、君鳴（きみしま）、五丁目（ごちょうめ）、三丁目（さんちょうめ）、地ノ唐荷（じのからに）、嶬峨山（じょうがさん）、正法寺山（しょうほうじやま）、城ノ越（しろのこし）、城山（しろやま）、竹岡（たけおか）、長老ケ谷（ちょうろうがたに）、燈籠堂（とうろうどう）、中ノ唐荷（なかのからに）、長浜（ながはま）、七丁目（ななちょうめ）、七曲り（ななまがり）、弐丁目（にちょうめ）、弐ノ丸（にのまる）、八丁目（はっちょうめ）、日和山（ひよりやま）、弁天ノ端（べんてんのはな）、藻振（もぶり）、四丁目（よんちょうめ）、六丁目（ろくちょうめ）

図4　御津町大字位置図　　カシミール3Dに追記

図5　旧御津村の小字図　　『御津町史』第四巻　付図より引用

3）大字・小字が出てくる遺跡名

従来、遺跡名の命名は所在地の「小字」を採用することが多かった。実際、旧御津町時代に設定された遺跡名には「大字」・「小字」が頻繁にみられるので、以下にその具体例を列挙する。

尚、下線を付しているのが「小字」である。

① 朝臣

・朝臣山古墳群　・朝臣オノ木遺跡　・朝臣山田ノ前散布地　・朝臣万燈遺跡　・朝臣○○号墳
・朝臣妙泰散布地

② 碇岩

・碇岩朝地窯跡群　・碇岩南山瓦窯　・碇岩地獄谷剝山散布地　・碇岩南山散布地　・碇岩南山遺跡　・碇岩新池散布地　・碇岩新池遺跡　・碇岩馬道○○号墳　・碇岩馬道古墳群　・碇岩北山○○号墳　・碇岩北山古墳群　・碇岩蔵田○○号墳

③ 岩見

・岩見北山積石塚墳墓群　・岩見北山古墳群　・岩見北山積石塚○号墳墓　・岩見北山○○号墳
・岩見北山石組遺構

④ 苅屋
・苅屋遺跡　・宮ノ西ラ遺跡（注1）

⑤ 釜屋
・釜屋遺跡

⑥ 黒崎
・武山城推定地（武山古墳）・基山○号墳　・黒崎散布地　・綾部山○○号墳　・綾部山古墳群
・綾部山39号墳　・基山城推定地

⑦ 中島
・中島燈明田遺跡　・中島上吉氣遺跡　・中島散布地　・山王山古墳

⑧ 室津
・室津日和山散布地　・室津大浦散布地　・室津正法寺山遺跡

備考1：上記の遺跡の一部は、次節や第3章第1節に遺跡の概要を記載している。参考にして頂きたい。
備考2：各遺跡の場所の確認は、揖保郡御津町教育委員会が1997年に刊行した『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』を参照して頂きたい。

（注1）宮ノ西ラは『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』では大字が苅屋となっているが、田中早春氏の『揖保郡太子町御津町小字地名集』の大字は中島である。

第4節　周辺の遺跡

1）概要

揖保川流域の、旧石器時代から古墳時代について述べていく。但し、弥生墳墓や古墳の多さは揖保川流域の特徴なので、時代ごとの概要とは別に、図6を参照しながら弥生墳墓並びに古墳時代前・中・後期の古墳について、別項を立てて述べていくこととする（巻頭図版3・4参照）。

旧石器時代

気候は寒冷で、海水面が低いため、瀬戸内海が成立していない時代である。西播磨で確認されている遺跡は極めて少ないが、古くから揖保川上流の宍粟市波賀町名畑遺跡で尖頭器、御津町では碇岩の新池で細石刃核が見つかっている。さらに、新池の200m東の碇岩南山遺跡（約1.8万年前）では、発掘により2ヶ所の石器製作跡ブロックが検出されており、全国的にみても稀なケースである。

縄文時代

気候は温暖になり、土器が出現し、狩猟や漁撈が盛んにおこなわれた時代である。揖保川流域で確認されている遺跡は、河川から運ばれた土砂からなる微高地に立地している。新宮町香山遺跡では後期と晩期の土器・石器が確認されている。揖保川の東に流れる大津茂川流域の姫路市網干区坂出遺跡から土器と石器、同勝原区丁柳ヶ瀬遺跡から中期～晩期の土器・石器が出土し、後

者は拠点集落として重要な意味を持つ。又、太子町の川島遺跡も後期・晩期の土器と石鏃が採取されている。さらに、たつの市誉田町の片吹遺跡では、前期～晩期の土器が出土していて、中期～後期の住居跡が確認されている。

御津町では、複合遺跡の朝臣才ノ木遺跡から中期～後期の土器が出土しているが、住居跡など明確な遺構は見つかっていない。

弥生時代

縄文時代晩期ないし弥生時代早期と呼ばれる時期に朝鮮半島から稲作が伝来し、北部九州から遠賀川系土器が各地に伝播し弥生時代へと突入する。

揖保川流域は、県内出土の分銅形土製品（楕円形の粘土板の中央左右に大きいU字形のえぐりこみを入れた土製品）の多くが、この水系に集まっていることで知られている。一方で、銅鐸は乏しい。

前期の遺跡は、門前遺跡・神戸北山遺跡・常全遺跡・山津屋遺跡など揖保川中流域に多く、たつの市誉田町福田片岡遺跡では土坑から1000粒程の炭化米が出土している。近年には、発掘により太子町鍛冶田遺跡で弥生時代早期の水田跡が確認されている（注1）。

中期には中流域に中臣遺跡・北龍野遺跡・尾崎遺跡等があるが、中期中ごろに入ると檀特山遺跡のような高地性集落が現れる。しかしながら、低地の川島遺跡や立岡遺跡もある。これらの遺跡では讃岐からの搬入品もしくは模造品が出土する例があり、讃岐地域との頻繁な交流がうかがえる。又、新宮宮内遺跡（国史跡）は、環濠と墳墓を持つ遺跡である。

尚、近年はJR山陽本線網干駅周辺の開発に伴い（注2）、太子町鍛冶田遺跡・姫路市網干区和久遺跡や関ノ口遺跡・高田遺跡等で弥生土器や遺構の発見が報告されている。

御津町では、上吉氣遺跡から大量の前期～中期にかけての土器が出土している。中島澄明田遺跡でも弥生土器が出土していて、先の朝臣才ノ木遺跡で出土した弥生土器には、重弧文や木葉文を描いた前期前半の壺もある（注3）。

古墳時代

第2節で触れているように、縄文晩期から弥生時代の遺跡が揖保川左岸から大津茂川流域に多く存在している。自然災害で移転もあるが、弥生時代の集落遺跡の多くは、古墳時代に入っても生活痕跡が認められるものが多い。川島遺跡では古墳時代前期の住居跡が検出されている。和久遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭に100棟を超える竪穴建物が連綿と造り続けられており、拠点集落である。

尚、4世紀末ごろより大陸から須恵器が伝わり、生活様式に変化が出てくるのと、古墳築造構造と副葬品にも変化がある。ちなみに、初期須恵器は5世紀前葉頃より播磨で認められているが、太子町鵤石田遺跡では竈を持つ住居跡が発見されており、渡来系の人々の存在が垣間見える。近年、集落遺跡の姫路市網干区前田遺跡から30棟近い古墳時代の竪穴住居群と装飾付器台・コンパス文器台（初期須恵器）が発掘された（注4）。

古墳時代以前は、各地で比較的盛土の低い墳丘墓が造られていたが、人々を意識した盛土の高い大きな古墳の築造に代わる。このことは、被葬者の権威を示す表れと理解する。但し、古墳は、弥生時代からの伝統的な在地的要素を主として、ヤマト政権的要素も混在していたと考える。（117頁コラム3参照）古墳の詳細は2項以下で述べる。

2）弥生墳墓と前期古墳（2世紀後半から4世紀後半）

近年、古墳時代の始まりを3世紀初頭からと考える研究者も多くなってきていて、190年～250年前後を「邪馬台国時代」と表現することも増えている。この頃の墳墓（弥生墳墓）は、地域によって特性がある。播磨では、弥生時代の墓は方形周溝墓・円形周溝墓が主であるが、西播磨を代表する弥生墳墓は、明確な墳丘を有する赤穂市有年原・田中1号墳丘墓である。この墳丘墓は周濠を巡らす直径19mの円丘に陸橋部と突出部を備えるもので、円礫の川原石を用いた葺石があり、葬送儀礼に使われる大型装飾器台・装飾壺を墳丘上に立て並べていた。瀬戸内海から千種川を遡った川津の近辺に位置し、周辺には牟礼山田1号墓もあるなど、有年は当時の拠点と考えられる。

一方、揖保川流域の主要な弥生墳墓としては、龍野町の白鷺山箱式石棺墓と揖保川町の養久山墳墓群、御津町の綾部山39号墓がある。白鷺山箱式石棺墓は工事中に2基の組合わせ式箱式石棺が発見されたもので、一号棺は朱塗りの礫床から人骨や舶載内行花文鏡片が、二号棺からは仿製内行花文鏡や鉄器が出土した。養久山墳墓群は、43基の内、38基が弥生墳墓である。低い墳丘は双方形や楕円形で、主体部は土器棺・木棺・箱式石棺・土壙墓などの複数埋葬である。中には近接する2つの墳墓が前方後方形に見えるものもある（第6章第3節2）参照）。

綾部山39号墓は破砕された画文帯神獣鏡・管玉・砥石等が出土している（第3章第1節17）参照）。特徴的な主体部は石積み囲いを有する竪穴式石槨で、外側は人頭大の円礫をバスタブのように囲い、中間には亜角礫を積み、内側はコウヤマキ製の木棺という完璧な3重構造である。棺内には水銀朱を大量に使い、床面は小円礫が敷かれ排水溝まであった。尚、天井石はなく木材で蓋をしていたようで、低墳丘である。このような主体部の構造から、讃岐・阿波の弥生墳墓との共通性が指摘されている。

そのほか、御津町岩見には、岩見港のすぐ北側に岩見港を見下ろすように造られた岩見北山積石塚墳墓群がある（第3章第1節12）・第7章第2節1）参照）。前方後方形で後方部を南の岩見港に向けた4号墓（23m）からは、讃岐で作られた大形壺の口縁部片が採取されており、土器や積石塚という構造から、讃岐との強い関連性がうかがえる。又、1号墓からは内行花文鏡が出土している。

このほかにも揖保川流域に弥生墳墓は多く築かれていて、龍野町片山東山墳墓群、揖保川町半田山墳丘墓群・宝記山墳墓群等が低い尾根筋に造られている。尚、御津町岩見の7基からなる岩見北山積石塚墳墓群もこの時期であるが、古墳時代後期の横穴式石室墳15基からなる岩見北山古墳群も併存している。

3世紀後葉頃から、ヤマトを中心に大形の前方後円墳が造られ、「前方後円墳時代」とも言われる時期に入る。この時期の古墳として、揖保川流域では、たつの市新宮町吉島古墳（34m）、揖保川町養久山1号墳（32m）、たつの市揖西町と揖保川町に跨がる龍子三ツ塚1号墳（38m）、大津茂川流域には西播磨最大の姫路市勝原区丁瓢塚古墳（104m）がある。一方、御津町では5面の三角縁神獣鏡と特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪が出土した権現山51号墳（42.7m・第3章第1節5）参照）と、同時期と思われる権現山50号墳（55m）、瀬戸内海沿いの奥塚古墳（99m）や武山古墳（約80m・第6章第3節6）参照）などがある。いずれも前方後円墳ないし前方後方墳で、特に御津地区は前方後方形の墳墓や古墳が造られる特徴があるので、この墳形は、在地的要素なのかもしれない。又、これらの古墳は、当時の大動脈である瀬戸内海と各地の河川の本流や支流から見える場所に築かれるという特徴もある。遺物からの再検討が必要だが、朝臣山古墳群の朝臣3号墳も4世紀後半に

遡る可能性がある。

千種川流域では、上郡町中山13号墳（38m・第6章第3節3）参照）、赤穂市放亀山1号墳（32m・第6章第3節4）参照）、相生市甲崎古墳（47m・第6章第3節5）参照）などが造られていく。しかし、揖保川流域と千種川流域の弥生時代終末期から古墳時代前期の弥生墳墓・古墳について比較してみると、揖保川流域が圧倒的に多く、墳形や副葬品、主体部の形態なども多様である。加えて、丁瓢塚古墳、奥塚古墳、武山古墳の規模と墳形は、被葬者の掌握していた力の大きさを示している。これは、西播磨はもとより播磨一円にかけてもいえることで、この時期、揖保川流域は他に抜きんでて多くの墓が営まれ、他を圧する勢力を誇っていたことがわかる。

3）古墳時代中期の古墳（5世紀代）

前項で述べたように、3世紀後葉過ぎから本格的に「前方後円墳時代」へ突入していき、ヤマト政権の勢力拡大に伴い各地に盛んに前方後円墳が造られるとともに、畿内での築造はピークを迎える。

一方、弥生時代終末期から古墳時代前期に多くの墳墓・古墳を築いてきた西播磨での前方後円墳・前方後方墳の築造は4世紀後半から減少傾向となり、揖保川流域ではその傾向が顕著である。西播磨のこのような動向とは対照的に、東播磨・中播磨で前方後円墳の築造が目立つ。

播磨で1番大きい前方後円墳は、4世紀後葉の神戸市垂水区五色塚古墳（194m）であるが、次は、長持形石棺が露出している5世紀前葉の姫路市壇場山古墳（142.8m）である。加古川水系では、5世紀前葉の加西市玉丘古墳（109m）、加古川市の4世紀中葉～5世紀前葉に前方後円墳の築造が続く日岡山古墳群（55m～90m）や5世紀前葉の行者塚古墳（99m）がある。これらは揖保川流域の前方後円墳よりも大形のものも多く、従前の揖保川流域の勢力を凌駕するといって差し支えない状態である。それに加えて、揖保川流域では、奥塚古墳や武山古墳のような大形の古墳が築かれていた御津地域とは異なる地域、すなわち、これまで前方後円墳がみられなかった揖保川の西側に相生市宿禰塚古墳（帆立貝形・約40m）と塚森古墳（帆立貝形・約60m）が築かれる。あたかも、同一水系の中で墓域の移動を伴うような主導権の変化があったように見える。

これについては、古墳時代前期に西播磨で連綿と造り続けられた代表的な古墳は、ヤマト政権と直接関わりのある豪族クラスの人々の墓と考えられるが、4世紀後半に入り、ヤマト政権内部の変化と連動して播磨における豪族の勢力図が塗り替えられ、西播磨よりも市川東岸や加古川流域、さらに明石海峡一帯の勢力がヤマト政権と深く関わるようになって、必然的に揖保川流域を中心とする西播磨の地位が低下し、中・東播磨の勢力下に置かれるようになったと理解されてきた。つまり、揖保川流域とヤマト政権との関りが希薄化し、播磨の主勢力は市川以東に移り変わったというものである。しかしながら、御津地域には今回測量を行った朝臣4号・5号・7号墳などをはじめとして、朝臣3号墳や綾部山古墳群等に、埴輪を持つ4世紀後半～5世紀の中規模の古墳が存在していることが明らかになった。これらの古墳は、権現山古墳群も含めてヤマト政権的要素と伝統的な在地的要素が混在した墓制の在り方がみてとれるので、弥生墳墓以来の伝統が完全に絶たれたわけでなく、首長系譜は続いていたといえる。確かに新たに勃興した加古川流域や市川流域の勢力には及ばないので、播磨の盟主的な地位は東に移ったが、御津地域を中心として揖保川流域の勢力は依然として健在だったのである。但し、西播磨において揖保川流域が一頭地

を抜く存在から、千種川流域の首長等も力をつけ伸展したことで、複数の首長系譜が肩を並べて並立する状態へと変化したのである。

又、前方部の短い帆立貝形古墳や造り出しを持つ円墳・方墳も5世紀代に集中する。加えて、5世紀後葉～6世紀初頭にかけて小型低方墳の群集する初期群集墳が各地に見られるようになる（注5・117頁コラム3参照）。揖保川流域にも同様の動きが認められ、朝臣山古墳群・碇岩馬道古墳群・黍田古墳群・タイ山古墳群などに、有力家長層の台頭を思わせる小型低方墳が築かれる。

ところで、日本列島で須恵器の生産が始まったのは4世紀末～5世紀初頭であるが、それほど間を置かずに播磨でも初期須恵器を伴う古墳が出現する。具体的には、赤穂市蟻無山1号墳（造出付帆立貝形・52m）、相生市宿禰塚古墳、姫路市宮山古墳（円墳・30m）、高砂市時光寺古墳（円墳・44m）、加古川市カンス塚古墳（帆立貝形・30m）、揖保川町黍田E号墳（方墳・7.5m×5.6m）、御津町朝臣7号墳等が挙げられる。尚、これらの古墳から出土している初期須恵器はヤマト政権の息のかかった陶邑から供給されたものではないので、在地窯の成立が推測されている（注6）。今のところ西播磨で確認されている須恵器窯で最も古いものは5世紀末頃の相生市那波野丸山3号窯（注7）で、御津町の碇岩古窯跡群における碇岩南山窯A（中池窯）（注8）は6世紀前葉と考えられているが、これらに先行する須恵器窯が存在していた筈である。

4）古墳時代後期・終末期の古墳（6世紀代から7世紀中葉）

古墳時代後期に入ると、埋葬施設が竪穴式石室や粘土槨から横穴式石室に変わり、追葬出来るようになる。又、古墳群・群集墳として一気に古墳の築造が増えて、播磨の古墳の内の80%以上が後期・終末期の横穴式石室墳である。尚、古墳は大化の改新頃まで築造されるが、大化の薄葬令を経て次第に新しい古墳の造営は停止する。但し、7世紀後半頃までは追葬は続いている。尚、主な群集墳は、図6下に隅丸方形で表示している。

横穴式石室は、九州地域が早くから採用し、約100年遅れの6世紀初頭に畿内へ伝播したと言われている。西播磨も同様の頃から横穴式石室墳がみられるようになり、150年間ほど続くのである。その間には石室構造にも変化がみられる。

一番古い石室は、天井がドーム形に持ち送られた、所謂、窮窿（きゅうりゅう）形であり、石材は小形の石を積み上げ、遺体を安置する玄室は正方形に近い平面形である。その後、大きい石材で組まれるようになり、特に奥壁は時代と共に大きな石を使用するようになって、数枚で構成されていたものから1枚石となり、玄室は長方形となる。終末期になると石室全体が小型化していき、墳丘は整然と区画された配置に並ぶとともに、方墳が多くなる。

又、石室の構造は、玄室とそれに取り付く通路である羨道から成るが、玄室と羨道の境目（袖）には4種類ある。奥壁から古墳入り口の羨道を見たときに、両方に袖があるのを両袖式、左にあるのは左片袖式、右にあるのは右片袖式、境目（袖）の不明瞭なものを無袖式と呼んでいる。尚、御津地域では、1997年の御津町埋蔵文化財分布調査の段階で、倒壊し不明なものが56基あるが、両袖式は18基、左片袖式は20基、右片袖式は29基、無袖式は106基であった。次に、御津地域の主要な横穴式石室墳を一部紹介したい。

綾部山古墳群では、綾部山28号墳（通称：正玄塚）の石室は南に向かって開口する両袖式で、全長7.0m、玄室幅1.8m、羨道長3.5m、同幅1.3mであるが、墳形は不明である。

岩見北山古墳群では、岩見北山3号墳は径11～12m、高さ3.6mの円墳である。石室は両袖式で南南西に開口する。奥壁上部に天井石が1枚のみ残っている。玄室の平面プランはタマゴ形で側壁は小さめの石を積み上げていて持ち送りがみえる。玄室長2.3m、同幅1.2m、同現高1.4m、羨道長2.0m、同幅0.8mである。

朝臣山古墳群の東側の小山にある小丸山古墳は、2基の横穴式石室を持つ全長48mの前方後円墳で、後円部幅30m、同現高4m、前方部現高3.8mである。後円部（東側）の石室は両袖式で西南西に開口している。玄室の天井石は発破にて残存しないが、羨道途中に閉塞石がみられる。石室の全長は7.7mで、玄室は3.4m×3.7mと正方形に近く、高さ2.65mを測る。羨道長は5.0mで幅1.18mである。この石室は、西播磨に横穴式石室が導入されて間もない、6世紀前半のものである。前方部（西側）の石室は両袖式で南に開口する。玄室の天井石3枚と羨道の天井石5枚が残っており、全長8.58m、玄室幅2.05m～2.10m、羨道長5.75m、幅0.95mと長大である。

権現山一帯には、古墳時代後期～終末期にかけて築かれた権現山古墳群、碇岩馬道古墳群、碇岩北山古墳群、碇岩蔵田古墳群があり、大規模な群集墳を構成している。多種多様の横穴式石室墳があるので、現地にて確認して頂きたい為、ここでは個々の説明は割愛する。

このように、御津地域をはじめとする揖保川流域の山塊には、多くの弥生墳墓・古墳が築かれていたのである。

（注1）（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　2016『兵庫県埋蔵文化財情報　ひょうごの遺跡』94号
（注2）太子町鍛治田遺跡は、主要地方道太子御津線（県道バイパス）建設に伴って兵庫県教育委員会・公益財団法人兵庫県まちづくり技術センターが発掘調査を実施している遺跡群の一部である。鍛治田遺跡の南には、北から順に姫路市網干区中筋遺跡・前田遺跡が位置する。これらは所在地の地名に基づいて遺跡名を分けたものである。又、関ノ口遺跡・高田遺跡では、区画整理に先立って発掘調査が実施されている。
（注3）中溝康則・芝 香寿人　2005「朝臣オノ木遺跡概要」『ひょうご考古』第11号　兵庫考古研究会
（注4）（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　2019『前田遺跡　10区　7-D区　現地説明会資料』
（注5）和田晴吾　1992『群集墳と終末期古墳』『新版〔古代の日本〕』第5巻　近畿Ⅰ　角川書店
（注6）植野浩三　1994『兵庫県千種川中・下流域の初期須恵器』『韓式系土器研究』Ⅴ　韓式土器研究会
（注7）河原隆彦・河井孝幸・石塚太喜三　1992『199　那波野丸山窯跡』『兵庫県史』考古資料編　兵庫県史編集専門委員会 編　兵庫県
（注8）上月昭信　2004『播磨地方における6世紀・7世紀の須恵器生産』私家版

参考文献
・松本正信・今里幾次　1978「第二章　考古学から見た龍野」『龍野市史』第一巻　龍野市
・瀬川芳朗・渡辺 昇・前田豊邦　1996「第三章　播磨国」『兵庫県の考古学』村川行弘 編　吉川弘文館
・中溝康則・芝 香寿人　1997『御津町埴蔵文化財分布調査』兵庫県揖保郡御津町教育委員会
・秋枝 芳・福井 優・松本正信・大谷輝彦・今里幾次・加藤史郎・山本博利・山本和子・小柴治子・中濱久喜・中川 猛　2010「3 弥生時代」「4 前方後円墳時代」『姫路市史』第七巻下　資料編　考古　姫路市
・松本正信　2013『姫路市史』第一巻下　本編　考古　姫路市
・岸本道昭　2013『古墳が語る播磨』神戸新聞総合出版センター

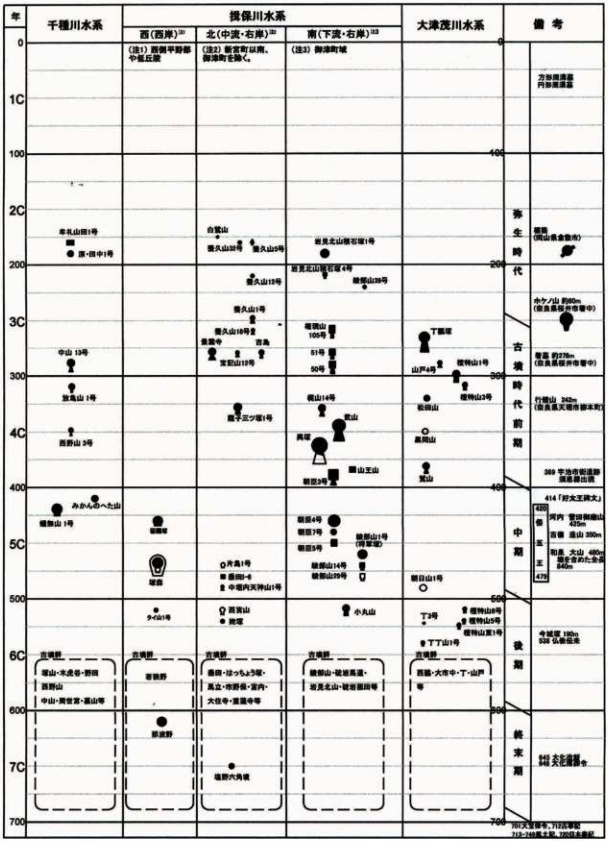


図6　揖保川流域を中心とした墳墓・古墳編年（2020年）

※ 図6は、岸本道昭　2013『古墳が語る播磨』神戸新聞総合出版センター　をベースとし、新たな情報を加えて、萬代・石黒が作成した。

第5節　『風土記』にみえる揖保郡

1）『風土記』とは

古代日本の『風土記』は有名なものだが、現在まで伝わっているのは、『播磨国風土記』・『常陸国風土記』・『出雲国風土記』・『肥前国風土記』・『豊後国風土記』の五つである。そもそも『風土記』は、大化の改新（645年）後の和銅6年（713年）5月2日の政府の命令に対して、国毎に国司を中心にして作られ、政府に報告された文書である。その命令の内容は、次の五項目である。

①郡や里の地名には漢字二文字で好ましい字をつけること。
②各国の郡にある銀・銅・草木・動物など、郡内にある農工以外で自然に存在するものの種類を記録すること。
③土地の肥え具合など、その様子を報告すること。
④山・川・野などの自然の土地につけられた名のいわれを書くこと。
⑤お年寄りが古くから伝えてきている話などを書くこと。

以上の五項目の命令について国々の捉え方に違いがあり、書き方や仕上げた時期はそれぞれの『風土記』によって違いがある。

『播磨国風土記』は明石と赤穂の全文と加古川の冒頭が欠けており完全ではない。しかし、その平安時代末の写本は国宝に指定されている。その中で、全81里が記録されており、揖保郡は最も多い18里が記録されている。この数字から当時の揖保郡の人口を推定すると、奴婢も含めて一戸20人程と仮定し、50戸で1里なので合計18000人程となる。

図7　『風土記』における揖保郡の里
『新解　播磨国風土記揖保郡条』より引用

2）『播磨国風土記』にみえる揖保郡の里

『播磨国風土記』が残されていることで、御津地域を含む播磨について、様々なことが判っている。播磨国は12郡を擁する大国である。その中の「揖保郡（いひぼのこほり）」は、揖保川流域の中流域から下流域の範囲で、その東は「飾磨郡（しかまのこほり）」、西は「赤穂郡（『風土記』

から欠落のため読み方不明）」と「讃容群（さよのこほり）」で、揖保川上流域は、「宍禾郡（しさはのこほり）」である。「揖保郡」には18里が記されており、御津町は「石海里（いはみのさと）」と「浦上里（うらかみのさと）」の二つが該当し、石海里（土地の肥え具合は上の中）は、現在の太子町南部から、姫路市網干区・余部区、御津町（旧御津村）である。浦上里（土地の肥え具合は上の中）は揖保川町浦部から室津港（旧室津村）にかけての場所である（図7）。

3）残された古地名

『播磨国風土記』には、「石海里」と「浦上里」に関連する地名として、神功皇后の渡航説話に登場する「宇須伎津（うすきつ）」、「船越（ふなこし）」、「石海（いはみ）」、「伊都（いつ）」、「御津（みつ）」がみられる。渡航経路については第2章で検討しているが、これら5つの地名については、ある程度場所の比定が可能である。

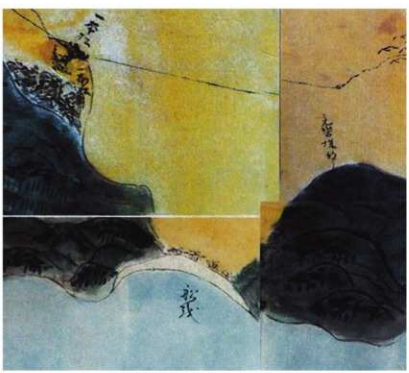


図8 伊能忠敬測量前網干地区説明図 船越拡大図

「宇須伎津」は現在の魚吹八幡神社が遺称地とされている。「船越」は伊能忠敬の測量前の現地説明図（19世紀初頭・第2章第2節参照）に記載がある（図8）。更に、黒崎地区自治会が1999年に編纂した『くろさきの歴史』に、大正11年（1922年）に「船越」の浜にあった墓地を「折敷谷」に移転し、跡地を「新舞子」と改称して観光地にしたとの記述がある。つまり、現在の「新舞子」は約100年前に「船越」から地名変更があったことを示している。ただし、1994年に刊行された『兵庫県小字名集』3 西播磨編（藩合重信編 神文書院）に「船越」という小字名は存在して居らず、住民の記憶には残っているものの、この地名が既に失われていることが知られる。

「石海（石見）」、「伊都（伊津）」、「御津」の地名については、『角川日本地名大辞典』28 兵庫県（注1）の記述を要約して、以下に紹介する。

いわみ「石海（石見）」（現在の岩見）

［古代］**石見郷** 奈良期～平安期に見える郷名。『風土記』には揖保郡十八里の一つとして「石海里」が見え、その地名は孝徳天皇の時代に、島根県西部・石見（石海）地方の人々を招集して開墾したことによるとされている。そして、石海里には酒井野・宇須伎津・宇頭川・伊都村・雀島などが含まれている。『和名抄』には播磨国揖保郡十九郷の一つとされており、東急本の訓は

「伊波美」である。

［中世］**岩見荘**　南北朝期～戦国期に見える荘園名。

［近代］**岩見村**　明治9～22年（1876～1989年）の村名。揖西郡のうち、片村・稲富村・伊津村が合併して成立。旧伊津村を同丙組、伊津村出屋敷伊津浦を同丁組と称した。

［近代］**岩見**　明治22年以降は大字名。

いつ「伊都（伊津）」

［古代］**伊都村**　奈良期に見える村名。『風土記』には、播磨国揖保郡十八里の一つ石海里に「伊都村」が見える。その地名由来は、神功皇后の御船の船頭たちが「何時（いつ）になったらこの地に帰ってきて、今見ているこの地の眺めを見ることができるだろうか」と話し合ったので、伊都（いつ）と名付けたという。尚、この時、船は宇頭川の泊から伊都に渡ろうとしており、当地も船の停泊地であったと思われる。

［中世］**伊津**　室町期から見える地名。播磨国揖西郡岩見荘のうち。『兵庫北関入船帳』によると伊津の船頭が米・小麦・小鰯・豆・塩などを積んで6艘入津している。当時は農耕のほか、伊津浦において漁業とともに海運業も営まれていたことがわかる。

［近世・近代］**伊津村**　江戸期～明治9年の村名。『西讃府志』（注2）によると、出屋敷として伊津浦があり、その集落は本村より広大であると記される。家数124・人数636で、産業は半農半漁。漁家は追々伊津浦へ移り住んで出屋敷を形成したとされる。明治9年には、岩見村の一部となり、伊津は岩見村丙組、伊津浦は岩見村丁組と称した。

みつ「御津」

［古代］**御津**　奈良期に見える地名。『風土記』には、播磨国揖保郡十八里の一つ浦上里のなかに「御津」と見える。その地名は神功皇后が三韓遠征の途中、御船を停泊させたことによるという。この場合の御津は港を指し、現在の御津町岩見の岩見港（伊津浦）付近に比定される。

［近代］**御津村**　明治22年～昭和22年（1947年）の自治体名。朝臣・岩見・碇岩・釜屋・苅屋・黒崎・中島の7カ村が合併して成立した。旧村名を継承した7大字があり、役場を朝臣に設置した。

［近代］**御津町**　昭和22年に成立した揖保郡の自治体名。

以上見てきたように、「石海（石見）」、「伊都（伊津）」、「御津」は大変古く1300年以上前から伝えられてきた地名である。

「いわみ」は、『風土記』では揖保郡十八里の一つとして「石海里」と表記されている。つまり、『風土記』の時代、伊都（伊津）や御津の上位行政地域として「浦上里」や「石海里」は広範な行政地名化していたのである。次いで「和名抄」では、播磨国揖保郡十九郷の一つ「石見郷」とあるので、「いわみ」は「里」や「郷」とみなされるかなり広い範囲を示す地名と考えられる。この傾向は中世の「岩見荘」にも引き継がれている。ところで、明治9年に「岩見村」が成立しているが、それは元々あった「岩見村」が他の村を統合・合併したりしたのではなく、「片村・稲富村・伊津村」が合併して新たに「岩見村」という村が誕生したのである。つまり、「石海里」→「石見郷」→「岩見荘」と呼び名が変わっていった範囲の中にあった村の一部が改めて「岩見

村」と名乗るようになり、それが現在では「大字」として引き継がれているのである。

一方、「いつ」は、『風土記』では「石海里」の中にある村で、船の停泊する「伊都村」であったことが判る。おそらく、図7に示したように、本村は現在の岩見港よりも東に位置したと推測できる。尚、『風土記』では現在の「家島」を「伊刀島」と称している。「伊都」と「伊刀」は同音で、海を介して深い関わりがあったことが想定できる（注3）。つまり、現在も「伊津湾」として海上にまで広がっている「伊津」の地名は、家島の古称「伊刀・いと」も考慮すると、本来は「伊都・いと」であり、「石海」、「浦上」を含む一帯を示す古層の地名であった可能性も考えられる。

中世には岩見荘の中に「伊津村」があり、「伊津浦」において漁業や海運業に従事し栄えていたことがわかる。ここでいう「伊津浦」は、伊津湾に面した現在の岩見港を指すと考えられる。尚、漢字表記の「伊都」から「伊津」への変化は、「港」としての津を意識して中世に付け替えられたのだろう。ところで、近世には、「伊津浦へ移り住んで出屋敷を形成した」ということなので、伊津村本村の西側の低い峠を越えて伊津湾の北岸側（現在の岩見港）へ移り住み、集落が拡大していった様子がうかがえる。

「みつ」は、『風土記』では播磨国揖保郡十八里の一つである浦上里の中にみられるということなので、図7に示したように、「伊都」よりは西側、現在の岩見港に近い位置を意味したのであろう。ただし、「岩見」や「伊津」と異なり、「御津」は中世や近世の史料にはあまりみられないようである。それが、明治22年に突如、7カ村が合併して成立した村の名前として出現する。しかもその範囲は、浦上里の海岸部に加えて石海里のかなりの部分を併せたものである。ここには、『風土記』にある「神功皇后が、御船を泊められた港」を意味する「津」の美称を選択して新たな村作りを進めるといった意識が働いたのではないだろうか。もっとも、「みつ」という地名の成立は、『風土記』にある神功皇后の渡航伝説とは別のところにあって、itsu（いつ）→mitsu（みつ）でmを付加する語頭子音変化が生じたことが想定できる。

（注1）「角川日本地名大辞典」編纂委員会　1988『角川日本地名大辞典』28　兵庫県　株式会社角川書店
（注2）江戸時代後期の天保10年（1839年）、丸亀藩の命を受けた那珂郡櫛梨村の秋山椎恭、丸亀藩儒臣の嶽村秩、加藤穀らにより編纂が進められ、安政5年（1858年）に完成した。
（注3）岩波書店刊行の「万葉集」（日本古典文学大系　4）付属の万葉仮名一覧表によると、奈良時代の万葉仮名甲類のと（to）の表記例として、『古事記』・『万葉集』には「刀」、『日本書紀』には「都」があるが、甲乙の区別なしのつ（tu）の表記例として、『古事記』・『万葉集』には「都」・「津」、『日本書紀』には「都」とあるので、「都」は何らかの読み指定が無ければ甲類のと（to）とも甲乙の区別なしのつ（tu）とも読める。したがって、「伊都」と表記した場合、「いと」でも「いつ」でも良いことになる。あるいは、『風土記』の編者が、既にあった「伊都・いと」の港津機能に引きずられて、読み指定を兼ねた説話「何時・いつ」を作成したのかもしれない。

参考文献
・白谷　隆　2012『私版　播磨国風土記』
・たつの市風土記ゼミナール　2016『新解　播磨国風土記揖保郡条』たつの市教育委員会
・黒崎地区自治会 編　1999『くろさきの歴史』
・ふるさとひょうご創生塾グループと同好会　2010『千葉県香取市　伊能忠敬記念館所蔵　絵図』　後援　神戸新聞社

第6節　朝臣地区の古墳

1）概要

本章第4節や第7章第2節にあるように、御津地域には岩見・綾部山・朝臣・権現山の4地区に多くの弥生墳墓・古墳が築かれている。その中で、本報告書で取り上げた朝臣4号・5号・7号墳を擁する朝臣地区は、御津地域に並ぶ東西に長い火砕流からなる3つの山塊（北から順に権現山、前山・雛山・朝臣山、綾部山・基山・武山）のうちの中央にある山塊（西から標高103.5mの前山・標高92.4mの雛山・標高67.0mの朝臣山。以下、この山塊を「朝臣山一帯」と表記する）とそのすぐ東側にある小山（標高33m。地元では「山王山」と呼んでいる）を併せた範囲で、これらの山頂や尾根筋等に30基ほどの古墳がみつかっている。尚、第2章で石黒始氏が詳述しているように、朝臣地区の南側・北側の平野はかつて内海であったので、古墳の多くは直接海に臨むように築かれていたと考えられる。

東側の小山の山頂には、古墳時代前期末から中期と考えられる長大な竪穴式石室がむき出しになった山王山古墳（注1）と、全長48mの前方後円墳で、明治時代に主体部が乱掘されて古墳時代後期初頭の装飾付須恵器（第3章図5参照）や馬具、埴輪が出土した小丸山古墳がある（注2）。小丸山古墳は前方部と後円部に横穴式石室があって、後円部の石室はアーチ状に積み上げられた穹窿式石室と考えられている。一方、朝臣山一帯については、比較的標高が低くて傾斜のなだらかな範囲は早くから開墾が進み、戦時中から戦後の昭和40年代には南斜面を中心に段々畑になっていた（巻頭図版2参照）。このため、墳丘が削られたり石室の石材が畑の石積みに再利用されたりして、山裾に横穴式石室墳の存在は知られていたものの、随所に葺石を伴う墳丘や横穴式石室が現存している権現山や綾部山と比べると、古墳の少ない山と認識されていた。又、前山・雛山の山頂付近は標高が100mほどあることを活かして高圧鉄塔や配水池が設けられたため、既に幾つもの古墳が壊されてしまった。

埋蔵文化財保護のために平成6年～8年（1994年～1996年）度に御津町全域を対象とした分布調査が行われ、朝臣山一帯についても新たな知見が得られた（注3）。更に、平成12年（2000年）度と平成15年（2003年）度に行われた国庫補助金による予備調査や、その後の周辺観察によって、朝臣山一帯に合計24基の古墳が存在していたことが判った（注4）。又、朝臣山南東麓には分布調査時に土師器・須恵器・陶磁器片が採取され、弥生時代から中世の遺跡の存在が推定された朝臣妙泰散布地がある。ここでは、御津町教育委員会によって2001年に試掘調査、2002年に本発掘調査が行われ、縄文時代から近世の複合遺跡である朝臣才ノ木遺跡の存在が明らかになっている（注5）。この遺跡からは古墳時代の土器も多く出土しており、御津町内で報告されたものでは最も古いTK208～TK23型式（5世紀第3四半期頃）の須恵器もあって（第6章図2参照）、朝臣山古墳群との関わりが考えられる。

尚、朝臣山一帯の古墳については、分布調査以降、「朝臣○号墳」という名称が付けられているが、古墳群の名称は「朝臣山古墳群」である。

2）朝臣山古墳群調査の歴史

朝臣山古墳群は、3度の調査等によって計24基の古墳がみつかっているが、中溝康則氏によると、分布調査に先立って朝臣山一帯に古墳があることを発見したのは上田哲也氏とのことである。昭和33年（1958年）に御津町が雛山の東側のピーク（標高55m付近）に配水池（貯水槽）を造成する

ためにブルドーザーで山を削っていたところ、阿蘇溶結凝灰岩で作られた環状把手付舟形石棺（図9）が現れたことを知った上田氏は、1961年にその概要を発表している（注6）。

平成になって埋蔵文化財保護のために行われた調査は、平成6年～8年度の分布調査（1度目の調査）、平成12年度の予備調査（2度目の調査）、平成15年度の予備調査（3度目の調査）である。

1度目の調査は、御津町教育委員会が中溝氏に依頼して行ったものである。朝臣山一帯の段々畑は高度成長期以降その多くが耕作放棄地となっており、背丈より高い笹が生い茂った場所の踏査は困難を極めたとのことであるが、この調査によって、既に知られていた小丸山古墳と山王山古墳に加えて、朝臣1号～9号墳までの9基の古墳が確認された（図10）。

2度目の調査は、朝臣山に御津町庁舎を移転する計画が持ち上がったことを受けて、御津町教育委員会の芝香寿人氏が調査を担当した。山頂や尾根筋にトレンチを設けて古墳の存在を追求した結果、3号墳が前方後方墳であることが判った他、1基の横穴式石室墳（10号墳）と1基の方墳（11号墳）、5基の小型低方墳（12号～16号墳）（注7）の計7基の古墳が確認された（第3章第11図参照）。

3度目の調査は、朝臣山一帯を「みはらしの森」として公園化するにあたって、遊歩道設置予定範囲における古墳等の有無を確認する試掘調査であった。とくに朝臣山の南斜面は地形改変が進み分布調査だけでは限界があったため、再度分布調査を進めながら、古墳が築かれやすい山裾や尾根筋、斜面部を中心にトレンチ調査を実施した。その結果、山裾に遺構は確認されなかったが、尾根筋・斜面部で中世～近世の石積み遺構・水溜め遺構や土塀の基壇部の石列遺構と1基の小型低方墳（17号墳）、3基の横穴式石室墳（18号～20号墳）の4基の古墳が確認された（注11）。

これらの調査に加えて、その後の周辺観察や聞き取り調査によって、4基の古墳の存在を推定するに至ったことで、朝臣山古墳群は合計24基の古墳から成る古墳群となった（注8）。

以下に、各古墳の概略を述べる。尚、1度目の調査によって『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』が刊行されているが、2度目と3度目の調査は確認調査のみであったため発掘調査報告書等は作成されていないので、中溝・芝両氏の手元にある調査記録や実績報告等に依って記述している。

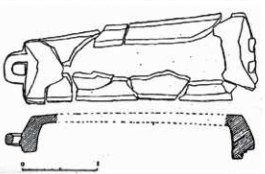


図9　朝臣1号墳舟形石棺図

3）1度目の調査

朝臣1号墳　（4世紀末～5世紀前半　円墳か　主体部は環状把手付舟形石棺　消滅か　写真集（2）参照）

昭和33年（1958年）に御津町配水池の工事現場において、上田哲也氏が阿蘇石（阿蘇溶結凝灰岩）製の石棺蓋を発見したことで、古墳が築かれていることが明らかになった。現在墳丘は大きく削られているが、これを1号墳とした。上田氏は「特殊家形石棺」という認識で、「石棺の身は現存していないが扁平な板石が散乱しているから、身は組み合わせ式になっていたと推測される。副葬品は存在しなかったが扁平な板石の一部に鉄サビ痕らしいものがある。」と報告されている（注9）。又、松本正信氏は、『龍野市史』・『御津町史』等に、石棺は板石の上に置かれていたと記されている（注10）。この石棺蓋は長さ2.8m、幅1.0m、高さ0.8mで、両小口に環状の把手が付いている（一部欠損・図9）。尚、中溝氏は、上田氏から、「古墳はブルドーザーで破壊されてい

たが大きな円墳で、蓋の内部には朱が一面に塗られていた。」と聞いているとのことである。この石棺蓋は現在、舟形石棺と認識されるようになっていて、その石材から、熊本県で作られて海路によって運ばれたことのわかる兵庫県内唯一の資料である。

朝臣2号墳　（5世紀か　墳形は不明　主体部は不明　消滅か）

雛山山頂で、「雛山城推定地」と同じ場所である。昭和35年（1960年）頃に関西電力の高圧鉄塔工事のために消滅したとされており、中溝氏によると、上田氏から「鉄鏃が多く出土した」と聞いたとのことである。現地を歩くと、葺石や敷石の可能性のある円礫がたくさんみられる。

朝臣3号墳　（5世紀初頭か　前方後方墳　主体部は不明　現存　写真集（2）参照）

朝臣山の山頂に位置する。1度目の調査で発見した際、大きな岩が点在している様子から一辺25m程度の方墳と推定された。2度目の調査の際、トレンチ調査によって、墳丘が東側にのびることやくびれ部の様子が観察できたので、墳丘長60～70mの前方後方墳であることが確認された。多くの赤彩円筒埴輪と数片の須恵器片、葺石石材が出土した。

朝臣4号墳　（5世紀第2四半世紀か　円墳　主体部は不明　現存　写真集（3）・（4）参照）

朝臣山一帯の西部、前山の山頂（標高103.5m）にある、直径約50m、高さ約6mの大形円墳である。盗掘坑等は見当たらず、主体部は不明である。朝臣山一帯で一番高い位置に築かれており、北は揖保川中流域、東は姫路平野・明石海峡・淡路島・生駒山、南には瀬戸内海（播磨灘）・家島諸島・小豆島・四国（香川県）等を望める見晴らしの非常によい古墳で、平野部だけでなく海を強く意識した立地といえる。尚、この古墳では、昭和44年（1969年）に当時高校生であった萬代和明氏が埴輪を表採され、古墳と認識されていた（第3章図1参照）。

1度目の調査で朝顔形埴輪や円筒埴輪の破片が表採されたことで、5世紀の古墳であることが判った（第5章図1・図4参照）。その後、この古墳の実測が何度か試みられたが、雑木が生い茂り伐採が追い付かないため断念したとのことである。この度、萬代氏がみはらし会会長の塚本敏昭氏並びに御津町の各自治会長方の協力を得て伐採が成り、実測の運びとなった。第4章朝臣4号・5号墳平面図（図2）でみるとおり、南部は本来の形状がよく残り、所々に20～30cm大の葺石がみられるが、数は少ない。墳丘には南から北東へ抜ける山道が横断しているほか、北側墳裾付近に関西電力の高圧鉄塔が建てられているなど、北側から東側面や北西部分が大きく崩れている。墳丘は、基本的に自然地形の高まりを利用しているが、古墳の南側（5号墳の南側）を削った土を盛土として使用したことが想定できる（第6章第2節参照）。尚、今回の実測調査の際、埴輪や須恵器を表採している（第5章参照）。

朝臣5号墳　（5世紀第2四半世紀か　略方墳か　主体部は不明　現存　写真集（3）・（4）参照）

4号墳のすぐ南側の古墳で、墳丘裾（東側・南側・西側）に列石がみられる。現地で観察すると、4号墳と5号墳を合わせて前方後円墳のようにみえるが、4号墳と比べて5号墳の墳丘はずいぶん低く、4号墳と5号墳の境をくびれ部とするには盛土が少なすぎるので、一体の古墳とするのは難しい。又、第4章朝臣4号・5号墳平面図（図2）でみるとおり、4号墳と5号墳の位置関係から主軸をうまく通すことができないので、やはり別々の古墳と捉えておく。南側の列石はとくに整然と直線状に並んでおり、列石の形状から、南北約24m、東西約28m、高さ約2.5mの略方墳と推定されている。又、列石付近等で須恵器・埴輪片を採取している（第5章参照）。

朝臣6号墳　(5世紀か　方墳か　主体部は不明　現存)

5号墳の南約100mに位置する。5号墳と6号墳の間の尾根筋には平坦面があるにも関わらず、古墳は築かれていないようである。雑木が多く生えていて墳形はわかりにくいが、一辺19m程度、高さ1.6mの方墳と推定される。ただし、主体部や葺石、遺物等の情報はない。

朝臣7号墳　(5世紀第2四半世紀か　円墳　主体部は不明　現存　写真集(4)参照)

6号墳より南にやや下った尾根の先端、標高86.5mほどの位置にある古墳で、眼前に瀬戸内海(播磨灘)が広がり、展望は非常に良い。墳丘の西側と南側に2～3段に積む列石が長さ5～6m程度残っていて、第4章朝臣7号墳平面図(図1)のとおり、直径約24m、高さ約2.5mの円墳である。昭和44年(1969年)にこの墳頂で萬代氏が鉄片(第5章第22図1)と埴輪片を採取されたほか、実測中にも墳頂で鉄片(第5章第22図2)、各所で埴輪片・須恵器片を採取している(第5章参照)。埋葬主体部は不明であるが、採取した遺物は副葬品ではなく、墳頂で行われた祭祀に伴う可能性がある。尚、6号墳と7号墳の間には、100mに渡って平坦面がのびている。

朝臣8号墳　(6世紀後半～7世紀　墳形は不明　主体部は横穴式石室　半壊　写真集(4)参照)

3号墳の北側約100mの山裾に広がる竹藪に位置する。盛土を失い石室が露出しているが、朝臣山の北側に昭和40年代まであった西芝電機社宅の共同浴場の東に位置しており、早くからその存在が知られていた。西方向に向かって開口する片袖式の石室のようだが、天井石や北側の右側壁を失っており、半壊状態である。玄室長3.3m・玄室幅2m・残存高2.2m、羨道残存長1.3mを測る。

朝臣9号墳　(6世紀～7世紀　墳形は不明　主体部は横穴式石室か　消滅)

朝臣山の東端は、昭和40年代にブルドーザーで整地され、約90m²の平坦地になっている。現在は岩見神社の御旅所の建物があり、ゲートボール場として利用されているが、そこには東側の南北道路より10mほど高い位置に横穴式石室墳があったと伝えられている。遺物についての情報はなく、石室は消滅していて、周囲に古墳の石室に使われたとみられる巨石が残っているのみである。

図10　1996年段階の朝臣山古墳群分布図(1度目)

4）2度目の調査

朝臣10号墳　（6世紀前半　墳形は不明　主体部は横穴式石室　略全壊）

3号墳墳頂から尾根を東へ100m近く下った所に位置する古墳だが、盛土・規模・墳形等は不明である。尾根筋を縦断する幅1mのトレンチがこの古墳の石室中央部を偶然通ったため、多くの遺物が出土した。出土した遺物は、須恵器（杯蓋・杯身・台付壺）・銀製耳環・紡錘車・算盤形の玉等で、須恵器の様相から6世紀前半の古墳と考えられる。尚、掘削はトレンチ内だけに留めたので、現地には遺物がまだ残っているはずである。

奥壁か側壁の石材と考えられる1m四方の巨石が1石だけ残存していたので、主体部は横穴式石室であると判断した。ただし、石室は略全壊しているので開口方向は不明である。仮に残存石材を奥壁と見做すと、東に向かって開口していたことになる。この古墳の北側は石切り場になっていて大きく穴が開いており、段々畑の石垣を作るために採石したようである。10号墳の石室も同様に採石対象となり、古墳の石材と分からないまま採石、加工（小割り）、破壊され、石材は徹底的に持ち去られている。しかし、盗掘が目的ではなく採石が目的であったため、多くの遺物が残っていた。この古墳は6世紀前半のもので、当地に横穴式石室が導入されてからさほど間を置かない時期の古墳であることから、中溝康則氏から、玄室の床面は正方形の可能性があると指摘を受けた。尚、奥壁の西側から円筒埴輪片が1片出土しているが、他の遺物との整合性から10号墳に伴うものではなく、山頂に位置する3号墳の埴輪が流れ落ちてきたものと判断した。

朝臣11号墳　（5世紀後半か　方墳　主体部は不明　現存　写真集（4）参照）

10号墳から数十m東の位置にある。規模は約21m×約19m、高さ約3.5mの方墳である。このように大きな盛土を持つ古墳であるが、雑木や笹が生い茂っていた1度目の調査時には見落としていた。2度目の調査の際、伐採されたことで新たにみつかった古墳で、周囲が畑として開墾されているにも関わらず墳形はほとんど崩れていないようにみえる。墳丘の西側には南北長約8mの掘り込みがあるが、東側・南側・北側に掘り込みはみられないので、周溝ではない。あるいは、11号墳の盛土を取った痕跡であろうか。尚、葺石や埴輪は見当たらず、時期比定は難しいが、その規模や周辺に小型低方墳が数基認められることから初期群集墳の首長墓と推測すると、5世紀後半の古墳といえるだろう。

朝臣12号墳　（5世紀後半　小型低方墳　主体部は箱式石棺か　現存）

10号墳の直ぐ東にある。僅かに墳丘状隆起がみられることから10号墳の「造り出し」にもみえたが、トレンチ調査で周溝と供献土器（須恵器）を検出したので、10号墳とは別の古墳であることが判明した。規模は一辺約10m×約8m、高さ0.73mの隅丸長方形の小型低方墳で、周溝を巡らす。北側の周溝に少し列石がみられたが、埴輪は皆無であった。尚、埋葬主体部は、割石を用いた箱式石棺のようである。周溝の幅は約1mで、周溝内の3カ所で土器供献祭祀が行われていた。a群は須恵器の杯蓋・杯身・高杯・ハソウのセット、b群は土師器の壺2個、c群は須恵器の壺3個と鉄器で（注11）、これらは周溝内に置かれてから投石によって壊されたと考えられる状態で検出されたそうである。更に、西側の周溝からは、粉々に割って撒き散らすように投げ込まれたとみられる須恵器甕片が出土した。これは、復元によって口径約40cm、胴径約70cm、高さ約90cmの大甕であることが明らかになっている。これらの土器から、「供献土器は、祭祀後にその場所で壊す」ことに意味があったと推測できる。

朝臣13号墳 （5世紀後半 小型低方墳 主体部は不明 略全壊）

12号墳の東側、直ぐ下の畑に位置する。トレンチ調査で確認したもので、一辺10.5m程度の隅丸方形の小型低方墳と考えられる。高さは不明だが、周溝が巡ることが判った。現在は、耕作放棄地だが開墾時に古墳が壊されたようで、周溝より小片になっている須恵器の杯蓋・杯身・高杯・壺胴部や須恵質円筒埴輪片が若干出土した。主体部床面に使われたとみられる2cm程度の小円礫も多数出土した。

朝臣14号墳 （5世紀後半 小型低方墳 主体部は不明 略全壊）

13号墳と同様にトレンチ調査で確認した古墳で、13号墳と11号墳の間に位置する。規模は一辺12m程度で高さは不明だが、周溝が巡る隅丸方形の小型低方墳と考えられる。現在は、耕作放棄地であるが、開墾時に墳丘が壊されたのか、須恵器甕胴部片2点、須恵質円筒埴輪片2点が出土した。更に、旧石器とみられるサヌカイト片5点も出土した。

朝臣15号墳 （5世紀後半 小型低方墳 主体部は木棺直葬 半壊）

13号・14号墳からやや南に下った位置にある。現在は耕作放棄地であるが、開墾され、削平によって真っ平になっている所に無作為に2m×2mのトレンチを設定して掘削したところ、古墳の主体部を掘り当てた。一辺約10m×約6.5m、高さ約0.9mの隅丸長方形の小型低方墳と考えられる。主体部は木棺直葬で、足元ないし頭部とみられる場所から須恵器7点（杯蓋と杯身の3セットと高杯）が出土した。トレンチ内だけの発掘に止めたので、墳丘基部や主体部の多くは残存している。

朝臣16号墳 （5世紀後半 小型低方墳 主体部は不明 略全壊）

11号墳の東側、墳裾に接するように位置する。1度目の調査の際、11号墳の東側の畑で須恵器片や円筒埴輪片を表採した。どの古墳に伴うものか判らなかったが、2度目の調査で11号墳を確認したことで11号墳の遺物と考えるようになった。ところで、2度目の調査時には11号墳の東側と南側の畑は耕作されていたが、耕作者より須恵器壺の破片が多数出土したとの届け出があった。そこで、11号墳のすぐ東側を試掘したところ、南北方向にのびる幅約1mの周溝を検出した。この周溝は、東へ曲がっていたので11号墳の周溝に成り得ないことから、16号墳の存在が明らかになった。表面上、古墳の痕跡は窺えないが、隅丸長方形の小型低方墳であろう。尚、埋葬主体部は破壊され残っていないようである。

5）3度目の調査

朝臣17号墳 （時期不明 方墳か 主体部は不明 現存）

16号墳よりも更に30mほど南東側の尾根筋に古墳状隆起が認められたため、幅1m、長さ11mの東西トレンチ（MM—11）を設定して掘削したところ、黒色系土と黄色系土を人為的に交互に盛った土層が確認できたので、古墳であることが判った。時期を特定できる遺物は確認できなかったが、現状は東西9.8m、南北6.6m、高さ0.6mの長方形を呈しているので、方墳と考えた。ただし、地形改変が著しいので、円墳の可能性もある。

朝臣18号墳 （6世紀～7世紀か 墳形は不明 主体部は横穴式石室か 略全壊）

トレンチ調査で、16号墳と17号墳の間に確認した古墳である。17号墳から10mほど西側に、幅1m、長さ11mの東西トレンチと幅1m、長さ3mの南北トレンチをT字形に配して掘削した（MM—12）結果、人頭大の割石が多く検出された。又、須恵器も2点出土したので古墳の可能性が高い

と判断して18号墳とした。墳形や規模は不明であるが、横穴式石室の可能性がある。

朝臣19号墳　（6世紀後半　墳形は不明　主体部は横穴式石室　半壊）

16号墳から南西へ40数m離れた南斜面に幅2m、長さ6mの南北トレンチ（MM―13）を設定した。この場所は段々畑に整地されているが、段状になっている斜面で数十cm大の石が出土した。調査の結果、盛土や天井石を失った半壊状態の横穴式石室の存在を確認した。この石室は、東側と西側に石材が4段積まれているので、これらは側壁であり、南方向に開口しているといえる。石室の現存高は1.3m、幅は1.34mを測るが、検出部分が玄室なのか羨道なのかは不明である。6世紀後半の須恵器が出土しているので、この時期の古墳であろう。

朝臣20号墳　（7世紀初め～7世紀前半　墳形は不明　主体部は横穴式石室　半壊）

19号墳の西側で確認した。トレンチMM―13から約10m北西側の斜面に一抱えほどの大きさの石材を3個積んだ段々畑の石積みがあったので、横穴式石室の可能性を考えて、幅2m、長さ6mの南北トレンチ（MM―15）を設定した。このトレンチでは、石室と断定できるような石材の並びはみられなかったが、古墳時代の須恵器や中世土器の破片が出土した。又、検出された黒褐色土層が盛土であるかもしれないという考えの下、西側に並行して幅1m、長さ5mの南北トレンチ（MM―16）を設けて掘削したところ、表土直下から古墳時代の須恵器片や平安時代の須恵器片が出土し、更に50cmほど下で小円礫群と碧玉製管玉5点、ガラス製小玉数点を検出した。これにより、古墳であることが判ったので、20号墳と命名した。しかし、開墾によって石室材が動かされているため石室の実態は不明であったので、トレンチを更に北側に1m延長したところ、西側に面をもつ1mを超える石材（奥壁）と側壁と考えられる石材を検出した。横穴式石室であることは確定したが、段々畑を設けたときに石室南部は既に壊されていて、このままでは崩壊する恐れがあることから、やむなく石室内を精査した。

その結果、南側の左側壁と羨道は完全に失われていたが、東に奥壁、北に右側壁の一部が残っており、石室は西方向ないし西南西方向に開口することがわかった。正確な規模は不明だが、玄室は幅1.1m、長さ2m以上残っており、片袖式の可能性が考えられる。残存する奥壁は幅1.1mの巨石が1石残るのみだが、北側の右側壁は基底石が4石残存しており、最も残りの良いところでは4段分、高さ2.15mまで確認できた。尚、右側壁は3段目から内傾しており、持送りであった可能性がある。又、側壁の間詰め石には円礫が使用されている。

玄室床面には1～10cm大の小円礫を敷き詰めているが、石室周辺から小円礫は出土していないので、敷石は玄室に限られ、羨道には及んでいなかったのだろう。又、棺台（あるいは石枕かもしれない）とみられる石材も認められた（注12）。この石材や遺物の出土状況から、この石材付近を頭部付近として東枕で葬られた被葬者の姿が想定できる。

玄室の床面ないし床面付近から出土した遺物は、須恵器11点（杯蓋6点・杯身4点・小型無頸壺1点）、玉類40点（硬玉製管玉5点・ガラス製小玉35点）、銀製耳環1点、刀子1点、鉄鏃3点で、これらは7世紀初め～7世紀前半のものである。須恵器9点（あるいは8点か）は床面から5cmほど浮いた状態で、石室主軸に平行するように東西に1列に並んで出土した。棺上に置かれた可能性もあるが、セットである蓋と身は蓋が開けられた状態を保っていた。一方、残りの3点（あるいは2点か）は北側壁に沿って立て掛ける状態で出土した。これらの下には厚さ18cmの堆積土があることや、他の須恵器よりやや古いものであることから、片付けに伴う二次移動が想定できる。すなわち、20号墳には

複数埋葬が考えられる。

玉類は2カ所から出土しており、MM―16掘削時に出土した碧玉製管玉とガラス製小玉は、石室のやや南側中央部での検出で、原位置を保っているのかどうか不明である。色とりどりのガラス製小玉31個は、棺台（石枕か）やその西側に散らばっているようにみえるが、同一レベルで検出しているので首飾りのような形ではなく、ガラス製小玉を縫い付けた布を被葬者の顔から胸元にかけて掛けたり敷いたりしたのかもしれない。又、刀子は刃先を被葬者の足下に向けるように副葬していて、これは原位置を保っているようである。鉄鏃は、棺台（石枕か）から60cmほど離れた位置にあって、被葬者の左手付近から2点、右手付近から1点が同一レベルで出土している。

耳環は、玄門側で床面よりかなり浮いた位置で出土しており、原位置を保っているとはいえない。又、羨道付近から須恵器が数片出土しているが、追葬や掻き出し、墓前祭祀等に関わるものなのかどうか判らない。尚、MM―15やMM―16の表土直下から出土した古墳時代の須恵器片も、20号墳の副葬品だろう。

ところで、20号墳の副葬品の種類は豊富だが、量は少ない。とくに須恵器は、横穴式石室墳に通有の高杯や提瓶ないし平瓶、壺等が出土していない。これは、埋葬当初から無かったとみるより、石室の南側が壊されたことで失われたとするのが妥当だろう。

6）3度目の調査以降の古墳の確認

朝臣21号墳　（6世紀中頃か　墳形は不明　主体部は横穴式石室　半壊か）

朝臣山への登り口に巨石があるのが気になったので注意深く観察したところ、台付子持壺の小壺片を表採した。中溝康則氏によると、たつの市揖西町東山古墳の出土遺物（注13）によく似ているとのことである。現地を更に詳しく観察すると、天井石は失われているが左右に側壁とみられる石が残っているので、横穴式石室に復元できるだろう。開口方向は南のようで、須恵器片を採取した位置は羨道付近であろう。

朝臣22号墳　（6世紀～7世紀　墳形は不明　主体部は横穴式石室　略全壊か）

畑の開墾によって壊された横穴式石室が次々と発見されるので、朝臣山への登り口や21号墳の周囲を丁寧に観察し直したところ、21号墳から南へ10mほど、登り口のすぐ下で、損壊著しい横穴式石室墳を確認した。天井石は失われているものの、側壁のかなり大きな石材が2～3段残っている。ブルドーザーで押されてほとんど破壊されているので墳形や規模は不明だが、周囲に小円礫が点在しているので、20号墳と同様の円礫床だった可能性がある。尚、磨石とみられる石器片や須恵器片を表採している。

朝臣23号墳　（6世紀中頃～７世紀　墳形は不明　主体部は横穴式石室　半壊）

ブルドーザーで西への遊歩道を作る際、芝氏が確認したとされる横穴式石室墳である。19号・20号墳の南西20mほどに位置しており、石室の基底石は残っているが、天井石は畑の開墾で既に失われていた。左片袖式で西方向に開口していたようである。墳形・規模は不明だが、須恵器長頸壺の完形品が１点出土している。

朝臣24号墳　（6世紀～7世紀　墳形は不明　主体部は横穴式石室　半壊か）

19号墳の東側、17号墳の南西側の段々畑の石積みは、横穴式石室の羨道を壊し、石室の両側壁を段々畑の石積みとしてうまく利用したもののようである。天井石は残っていないが、南方向に

開口していることは分かる。墳形・規模は不明。遺物が出土していないので古墳の築造時期を決めることはできないが、横穴式石室墳なので、6世紀～7世紀のものといえる。

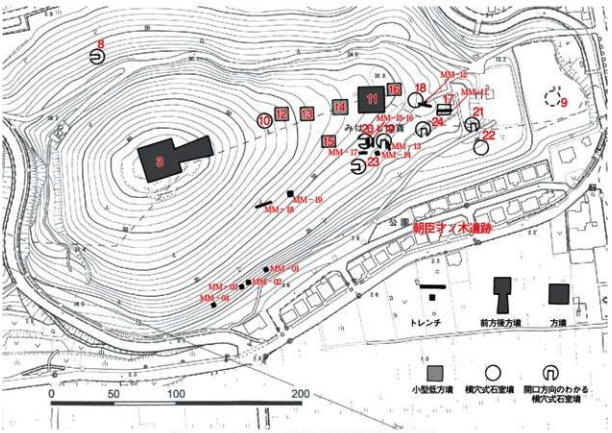


図11　2004年段階の朝臣山古墳群分布図（3度目）

7）まとめ

以上のように、古墳の存在がほとんど知られていなかった朝臣山一帯で、合計24基の古墳を確認することができた。その内訳は、古墳時代中期すなわち5世紀頃（推定を含む）の前方後方墳1基（3号墳）、円墳3基（1号・4号・7号墳）、方墳3基（5号・6号・11号墳）、小型低方墳5基（12号・13号・14号・15号・16号墳）、墳形不明1基（2号墳）である。このうち、主体部についてある程度情報があるものは、環状把手付舟形石棺（1号墳）、箱式石棺（12号墳）、木棺直葬（15号墳）である。又、主体部が横穴式石室であることから、古墳時代後期から終末期（6～7世紀代）のものといえるのは10基（8号・9号・10号・18号・19号・20号・21号・22号・23号・24号墳）である。これらはいずれも既に墳丘盛土を失っているため墳形は不明であるが、円墳の可能性が高いだろう。更に、時期を決められないが、円墳ないし方墳と考えられるものが1基（17号墳）ある。

その分布をみると、古墳時代中期のものでは、1号・2号・3号・4号・5号・6号・7号墳等が山頂付近に位置する。これらは単独墳といえる立地のものが多い。前方後方墳である3号墳や直径50mを測る大形円墳である4号墳はもとより、早くに損壊を被った1号・2号墳にしても、首長墳とみて大過ない。その一方で、朝臣山の東側尾根上には小形低方墳である12号・13号・14号・15号・16号墳が集中しており、同時期の中・小規模の首長墳かもしれない11号墳が近接している。

すなわち、上位の首長墓は山頂付近、それよりも下位の者の墓は朝臣山の東側尾根上といった墓域の区分が見て取れる。

古墳時代後期から終末期の横穴式石室墳については、3号墳に近い尾根筋上部に10号墳が築かれているが、その他は、朝臣山の東端や南斜面（9号・18号・19号・20号・21号・22号・23号・24号墳）と北側山裾（8号墳）で確認されている。10号墳は、他の横穴式石室墳と立地が異なるが、これは10号墳が6世紀前半と他の古墳よりも古い時期に築かれたものであり、単独墳といえる性格を持つためだろう。一方、他の横穴式石室墳は、中期古墳よりも標高の低いところに分布している。

このように、時期や墳丘規模によって、個々の古墳の立地が異なることが明らかになっている。尚、2度目・3度目の調査によって、耕作地として地形改変されていてもトレンチ調査で古墳の存在を確認できることがわかった。この調査方法をより広域に用いていけば、畑作等で破壊された横穴式石室墳や小型低方墳が更にみつかる可能性は極めて高い。

（注1）松本正信　1997「Ⅱ　考古学からみた御津町の原始・古代　4　前方後円墳の時代　⑪山王山古墳」『御津町史』第三巻　御津町史編集専門部委員会 編　御津町

（注2）松本正信　1984「Ⅲ　龍野市とその周辺の考古資料　48）小丸山古墳」『龍野市史』第四巻　龍野市史編纂専門委員会 編　龍野市、松本正信　1997「Ⅱ　考古学からみた御津町の原始・古代　4　前方後円墳の時代　⑭小丸山古墳」『御津町史』第三巻　御津町史編集専門部委員会 編　御津町、松本正信　2001「第二章　考古学からみた御津町の原始・古代　第六節　民衆が古墳を築いた時代」『御津町史』第一巻　御津町史編集専門部委員会 編　御津町

（注3）兵庫県揖保郡御津町教育委員会　1997『御津町埋蔵文化財分布調査報告書』

（注4）中溝康則　2003「西播磨における5世紀後半の低位墳丘墓の出現について」『関西大学考古学研究室五拾周年記念　考古学論叢』関西大学考古学研究室五拾周年記念刊行会　に、朝臣山古墳群が紹介されている。

（注5）中溝康則・芝　香寿人　2005「朝臣オノ木遺跡概報」『ひょうご考古』第11号　兵庫考古研究会、白谷朋世　2005「オノ木遺跡出土の遺物―緑釉陶器を中心として―」『ひょうご考古』第11号　兵庫考古研究会、白谷朋世　2005「播磨国揖保郡の港についての一試論―五泊と朝臣オノ木遺跡の検討―」『待兼山考古学論集　都出比呂志先生退任記念』大阪大学考古学友の会

（注6）上田哲也・増田重信　1961「播磨御津町中島出土の特殊家形石棺」『古代學研究』26　古代学研究会

（注7）今回「小型低方墳」として報告している古墳について、中溝康則氏は（注4）で、「龍野タイ山型・低位墳丘墓」という用語を提唱されている。又、この「低位墳丘墓」が確認されている古墳群として、「タイ山古墳群」（上田哲也・中溝康則・是川　長　1982『長尾・タイ山古墳群』兵庫県龍野市教育委員会）や「黍田古墳群」（松本正信・加藤史朗　2000「黍田古墳群」『山津屋・黍田・原』揖保川町教育委員会）を挙げられている（次頁コラム1参照）。

（注8）兵庫県立考古博物館のHPで公開されている『兵庫県遺跡地図』には、15号墳までしか登載されていない。

（注9）（注6）と同一文献。

（注10）松本正信　1978「第2章　考古学からみた龍野　第3節　前方後円墳の時代」『龍野市史』第一巻　龍野市史編纂専門委員会 編　龍野市、松本正信　1997「Ⅱ　考古学からみた御津町の原始・古代　4　前方後円墳の時代　⑩朝臣鰡山出土舟形石棺」『御津町史』第三巻　御津町史編集専門部委員会 編　御津町、松本正信　2001「第二章　考古学からみた御津町の原始・古代　第五節　前方後円墳を築いた時代二」『御津町史』第一巻　御津町史編集専門部委員会 編　御津町

（注11）中溝氏によると、確認調査なので全面発掘は控えたとのことであるが、周溝のどの範囲を掘削したのか、a群・b群・c群が具体的にどのような位置・範囲なのかについて、氏は明確な記録は有しておられないようである。

（注12）20号墳については、芝香寿人氏が編集を進めておられた発掘調査報告書の原稿を参考にしているが、未完で図面等の添付がなく、事実確認ができない。「棺台」とされている石材の位置・規模や玄室から出土した須恵器の総数、具体的な被葬者の位置、棺体配置等、不明な点が多い。本来であれば、原図や出土遺物を検討した上で記述すべきであるが、その作業ができていないことを断っておく。

（注13）井森徳男　2005「兵庫県出土の装飾付須恵器集成（3）」『研究紀要』第4号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所。又、たつの市教育委員会　2008『古代人の造形』〈たつの市埋蔵文化財センター図録5〉には、中垣内古墳出土の台付子持壺の写真が掲載されている。

コラム1　文中の「小型低方墳」について

この用語は、和田晴吾氏が、1988年に「南山城の古墳―その概要と現状―」『京都地域研究』四において論じたものである。ここでは、一辺が数mから10m前後の小型で墳丘の低い方墳を、在地の首長の下に位置する有力家長層の墓と考えられていた。その後、氏は、2018年の『古墳時代の王権と集団関係』吉川弘文館では、「周溝墓」という用語を使われている。

ところで、2003年に中溝康則氏は「西播磨における5世紀後半の低位墳丘墓群の出現について」『関西大学考古学研究室五十周年記念　考古論叢』で、「低位墳丘墓」という用語を提唱した。これは「5世紀の古式須恵器を伴う低位墳丘の古墳」を略した用語で、その条件として、①8～10m程度の規模・盛土は1m程度、②墳形は隅丸長方形（円形もある）、③幅1m程度の周溝、④周溝内に須恵器のセット、⑤須恵器は破砕、⑥主体部は木棺か箱式石棺、⑦埴輪はほとんど未使用、を挙げている。そして、低位墳丘墓は、⑧10基程度の古墳群を形成、⑨古墳群内に前方後円墳は存在しない、といった特徴を有することを指摘している。尚、墳丘の低さを持って「低墳丘墓」としなかったのは、上位の首長墓と区別するためで、部民（べのたみ）クラスの人々の墓と考えられるからである。さらに、渡来系の人々の墓の可能性も想定されている。

和田氏の「小型低方墳」と中溝氏の「低位墳丘墓」には共通する事項が多く認められる。本報告書では、弥生時代の方形周溝墓や墳丘墓と区別し、5世紀後半の初期群集墳を構成する墳丘の低い方墳については、「小型低方墳」と呼ぶこととする。

前方後円墳などの3～5世紀代の大型古墳の主体部は、長大な竪穴式石槨であるが、5世紀後半（横穴式石室採用前）の西播磨の古墳群は、小形（10m程度）の方墳・円墳が多く、主体部は木棺直葬や箱式石棺で、おのずから墳丘は1m未満と低くなる。しかも、単独でなく古墳群を形成していて、その一つが朝臣山古墳群である。朝臣山古墳群では、畑の開墾で削平されたものが多いが、御津町の碇岩馬道古墳群では、よく観察すると墳丘が観察できる。ここには9基の「小型低方墳」が存在しており、図12は、その中の碇岩馬道7号墳（東西10.8m・南北9.8m・高さ0.6m）である。（文責：髙代）

図12　碇岩馬道7号墳　小型低方墳